

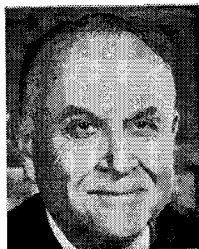


信徒の道 1972 6

心の糧

十二使徒評議員会補助

デビッド・B・ハイト



ニーファイは良き両親がいることを非常に感謝していたと思う。私の母は早くして未亡人となったが、子供を霊的に鍛える義務を決して怠ることはなかった。長い間病床に伏していた時でも、母は私にいろいろな教訓を与えてくれた。また母の証が決してぐらつくことがなかったことを私は幼い頃から知っていた。

父は常に私の理想とする人であった。私は幼い時から父のように、力の限り奉仕し、人々を助け、また教会や社会に関与し、援助を惜しまない人になりたいと望んでいた。

父は、かつて祖父がそうであったように、教会の指導者の召しに応じ、その指示に従った。私の子孫もこのようになってくれたらと祈る気持である。

今私は、人生経験や人格形成において手助けとなった人々の残してくれたものを大切にしている。

ある人はこう話している。「父親が息子に残すことのできる遺産のうち、良い評判ほど大いなる遺産はない。また家族にとって気高い先祖の誉れほどぜいたくな家宝はない。」

— も く じ —

エライジャの訪れ……………大管長	ジョセフ・フィールデング・スミス…	241
予言者エライジャ……………	ハワード・W・ハンター…	244
「こはわが愛子なり」……………	ローレン・C・ダン…	248
選びの時……………	エルレイ・L・クリスチャンセン…	251
犠牲は祝福をもたらす……………	ハートマン・レクター・Jr…	254
働くよろこび……………	ウェンデル・J・アシュトン…	257
「愛もて互いに仕えよ」……………	S・ディルワース・ヤング…	258
小石のスープ……………	レオーネ・キャステル・アンダーソン…	261
アビナダイ……………	メイプル・ジョーンズ・ガボット…	264
むちの音……………	メアリー・プラット・パリッシュ…	266
マービン・J・アシュトン……………	ドイル・L・グリーン…	269
若者に向けられるサタンの刃……………	エズラ・タフト・ベンソン…	278
父よ……………	リチャード・L・エバンズ…	283
はじめての言葉……………	アイリス・シンダー・ガード…	284
ローカルニュース……………		286

6月のこよみ

- 4日 1837年 英国伝道部開設さる。
- 9日 1830年 教会設立後最初の大会が
ニューヨーク・フエイヤ
ットで開かる。
- 10日 1857年 YMMIAが組織さる。
- 27日 1844年 ジョセフ・スミスとハイ
ラム・スミス殉教す。

今月の表紙

今月の表紙は、1971年12月2日、十二使徒評議員に召されたマービン・J・アシュトン長老である。この神権時代にあつて79番目に使徒職に召された。裏表紙は、アシュトン長老夫妻が孫のマイケル・アシュトンとひとときを楽しんでいるところである。ドイル・L・グリーンによる「十二使徒評議員、マービン・J・アシュトン」(P. 269)を参照のこと。
(表紙の写真は教会インフォメーションサービスの好意によるもの。裏表紙は、エンサイン誌の写真担当、エルドン・リンショッテンの撮影による。)

聖徒の道

1972年6月20日発行
発行人 マービン・S・ハーディング
発行所 東京都港区南麻布5-8-10
末日聖徒イエス・キリスト教会
電話(442) 7459
印刷所 太陽印刷工業株式会社
定 価 100円
予 約 一年間 1,000円
外国 4ドル50セント

エライジャの訪れ

大管長 ジョセフ・フィールディング・スミス

旧約の最後の予言者マラキは、次の言葉でその予言を結んでいる。

「見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは予言者エライジャをあなたがたにつかわす。彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもって地を撃つことのないようにするためである。」

(欽定訳マラキ 4 : 5-6)

古代の最後の予言者が将来への約束でその言葉を結び、その約束の中で、後の神権時代と過去の神権時代をつなぐ来るべき時について予言していることは、非常にふさわしいことであると思われる。マラキの予言的な言葉は、ほとんどの注釈者にとって理解できない奥義であると言われてきた。特に、エライジャの訪れに関する彼の宣言は理解されていない。

この混乱の生じたのは、聖書注釈者の理解の欠如によるところが大きい。キリストの時代よりほぼ千年前に生きていた古代の予言者が、マラキが述べ、エライジャが所有していたような著しい権能をもって送られる可能性があることと、それが道理にかなっていることとを、彼らは理解していないのである。この予言は、父の心を子供たちに向け子供たちの心を父に向ける権能を持っていた、エリヤとしてのバプテスマのヨハネの訪れによって成就されたというのが一般の解釈である。この解

釈が下された1つの理由は、天使がヨハネについてザカリヤに語った言葉の理解を誤っていることによる。

「彼はエリヤの霊と力とをもって、みまえに先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に義人の思いを持たせて、整えられた民を主に備えるであろう。」(ルカ 1 : 17)

ヨハネがエリヤの霊と力をもって来たことは確かであるが、マラキのその言葉は、末の日に、しかもキリストが地上に再臨される主の大いなる恐るべき日の直前に起こるように計画された事柄を示している。また、聖典に信頼を置いている人にとって、古代の予言者が末日に地上に送られると信ずることは道理にかなっている。ペテロ、ヤコブ、ヨハネがキリストと共に変貌の山に行った時のモーセとエリヤの顕現について、福音の筆者たちは非常にはっきりした記録を残している。では、モーセとエリヤが地上で生涯を過ごした数百年後にそのように弟子たちに現われることができたなら、彼らが救いのメッセージと権能を持って我々の時代に再び地上の人々のもとに送られ得ると信ずることも道理にかなっているのではなからうか。

救い主と弟子たちが変貌の山から下って来る時、主は、御自分が死からよみがえるまでこの顕現についてだれにも話してはならないと彼らに命じられ

た。しかし、彼らはエリヤの訪れについてあることを知りたいと願った。そこで、主は彼らの問いに答えて言われた。

「確かに、エリヤがきて、万事を元どおりに改めるであろう。しかし、あなたがたに言うておく。エリヤはすでにきたのだ。しかし人々は彼を認めず、自分かってに彼をあしらった…」(マタイ 17 : 11-12)

その時、弟子たちは主がヨハネのことを言われたのだと悟った。救い主はバプテスマのヨハネがエリヤとして来たこと、すなわち主の前に道を備えるために来たことをそこで明らかにされた。しかしまた、万の物事を回復する権能を持つ他のエリヤが将来いつか来るに違いないことをも、主は明らかにされたのである。ヨハネの務めは大切ではあったが、彼はその短い期間に万の物事を回復しはしなかった。彼の務めはイエス・キリストのみ業の備えをなすことであり、その点で彼はエリヤであった。

エリヤという名称は固有名詞以上のものである。それは称号でもある。エリヤは、従うべき、自分よりも偉大な方の道を備えるために、その偉大な方の前を進む人である。ヨハネはこの召しを受けて働いたが、しかし万の物事の回復者ではない。万の物事の回復は、キリストがそのみ業につかれた時の絶頂に成就するものとして意図されていた



なかったことは明白である。この偉大な業は末日のために備えおかれた。少しの間、この点について考えよう。

主が昇天されるすぐ前に、弟子たちは主に次のように尋ねた。「主よ、イスラエルのために国を復興なさるのはこの時なのですか」。すると主は彼らに答えられた、「時期や場合は、父がご自分の権威によって定めておられるのであって、あなたがたの知る限りではない。」（使徒1：6－7）この返答は、回復が弟子たちの時代に行なわれるのではないという意味にほかならない。

後に、この真理はこれらの弟子たちにとって非常に明らかなものとなった。この出来事のすぐ後に、ペテロは主の死を促したあるユダヤ人たちに訓戒を与えた。ペテロは、罪が消し去られるように悔い改め、改宗するよう彼らに告げた。「それは、主のみ前から慰めの時がきて、あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを、神がつかわして下さるためである。このイエスは、神が聖なる予言者たちの口をとおして、昔から予言しておられた万物更新の時まで、天にとどめておかねばならない。」（欽定訳使徒3：20－21）

パウロはまた、エペソの聖徒たちにあてた書簡で、時満ちたる神権時代に御父は「天にあるもの地にあるものを」ことごとくキリストにあって1つに集められると、彼らに告げた。（エペソ1：10）

回復の時がイエス・キリストの再降

臨に近づくまで来ないことを、弟子たちは知っていた。また、エライジャが神権を地上に持ち帰り、地と天において結び固める権能を人々に回復するのは、その時代であることを知っていた。それによって、人類は主の大いなる恐るべき日に邪悪な人を待ち受けている滅びから逃れる術を持てるのである。この大いなる恐るべき日とはまさに、地に住む義人の間に権能をもって王国を打ち建て、すべての邪悪から地を清められる、イエスの来臨の時である。それは義人の心に不安を与える恐れの日ではなく、罪深い者にとっての恐れと恐怖の大いなる日である。救い主がその弟子たちに教えられたように我々はこのことを主御自身のみ言葉から知ったのである。

ニューファイ人の予言者モロナイから伝えられたマラキの言葉によって、さらにははっきりした解釈が与えられている。天使モロナイは、1823年9月21日にジョセフ・スミスに現われ、次のようにその言葉を引用した。

「見よ、主の大いなるおそるべき日の来る前に、予言者エライジャの手によりて、われ神権を汝に顕さん。彼は先祖になされし約束を子らの心に植え、子らの心にその先祖を思わしめん。もし然らずば、主の来る時、全地はことごとく荒れ廃れん。」(教義と聖約2:1-3)

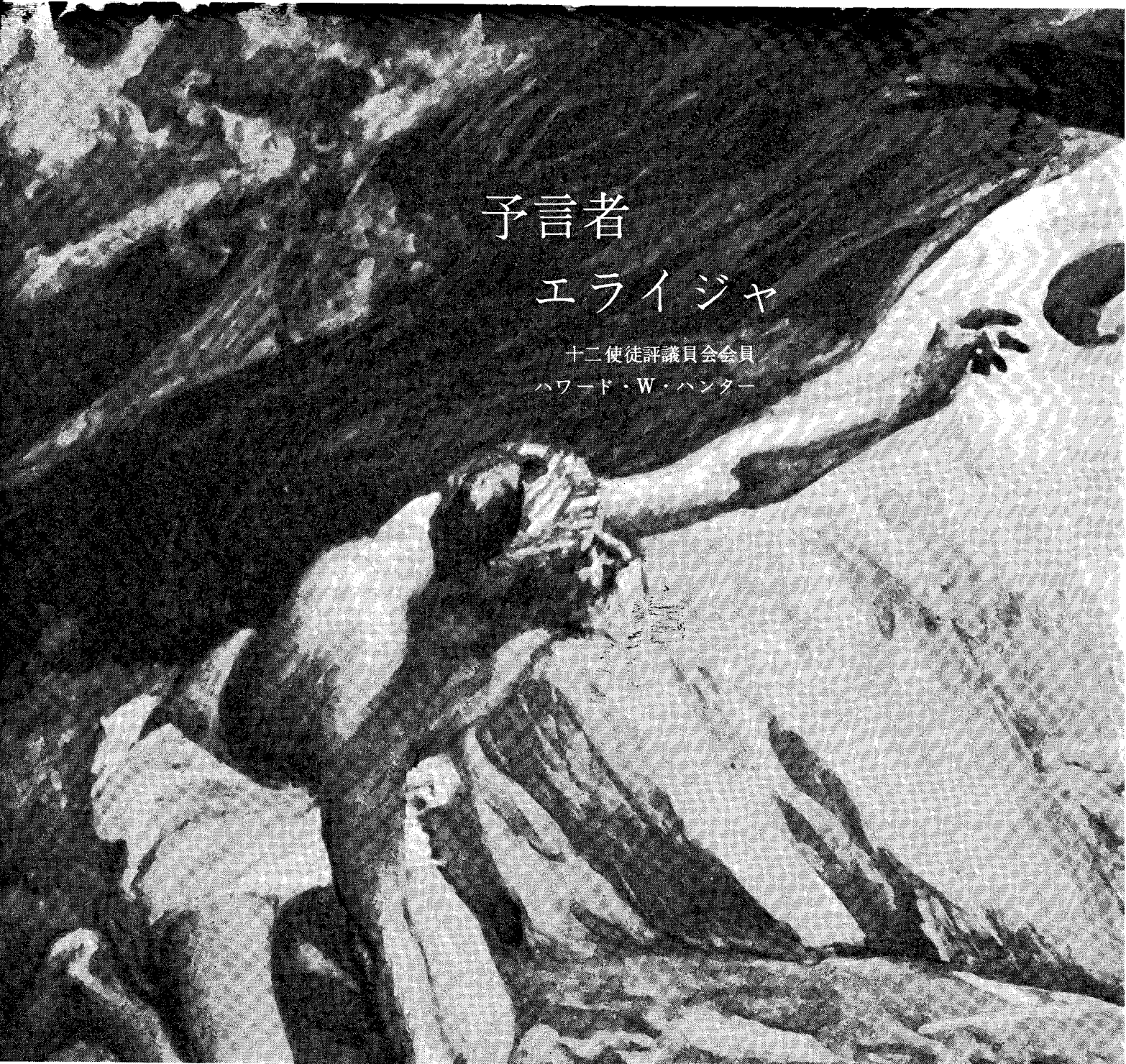
モロナイは、この予言が成就するであろうとジョセフ・スミスに告げた。そしてその13年後、すなわち1836年4月3日にそれは成就した。この日、カ

ートランド神殿でエライジャがジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリに現われ、神権を彼らに授けた。それは地と天において繋ぐ、すなわち結び固める権能である。この神権の鍵はエライジャが保有していた。主は、全き救いにあずかるためのすべての儀式を今も永世にも義人の上に結び固める権威と共に、人のみでなく元素にも及ぶ力をエライジャに与えたもうたのである。エライジャはこの神権の鍵を持っている最後の予言者であると、予言者ジョセフ・スミスは語った。エライジャは、すべての福音の儀式が義になんて執り行なわれるように、最後の神権時代に訪れてこの権能を回復しなければならなかった。この権能なしには、儀式は義になんたものではないのである。

そのために、この権能の回復は、イエス・キリストの来臨の時に全地が荒れ廃れることがないようにする力である。この事実を我々の心にしっかり確実に留めると、キリストが来られ、結び固める力がこの地上にないことは、この上ない混乱と不幸を生じることであると容易に知ることができる。たとえば儀式が主のみ名によって執行されても、それが主のみ旨に従ったものであり、かつ権能を授けられた僕として認められた人により行なわれなければ、主はそれを認められない。主がみもとから聖なる使いたちをジョセフ・スミスや他の人々に送られ、地から取り去られていた、全き福音や全き神権、神権の鍵を回復されたのは、その理由に

よるのである。この回復の日に来る必要があったのは、すべての福音の儀式を正当なものとする結び固める力を持つエライジャだけではなかった。アダムの時代からペテロ、ヤコブ、ヨハネに至るまでの神権時代の鍵を有する古代の予言者たちが来て、この時満ちたる神権時代に彼らの権能を回復することも必要であった。先の時代のイエス・キリスト教会の聖徒たちに与えた指示の中で、ペテロとパウロはこのことをはっきり述べている。しかし、我々は結び固める鍵、すなわち末日聖徒イエス・キリスト教会で行なわれているすべての事柄に承認の印を押す鍵をもつエライジャの訪れについてのみ今考えている。それによってすべての事柄は天でも神の王座の前でも認められるのである。

エライジャが保有していたこの権能の回復を通じて達成された最も大切な事柄は、祖父になされた約束を子孫の心に銘じさせることである。その約束とは、神の王国における救いが救いを受けるにふさわしいすべての先祖に与えられるように、先祖のための儀式が主の宮居で執行されるというものである。これは先祖のためにその子孫によって行なわれる身代りの儀式を通じて実施されなければならない。エライジャは、夫と妻がこの世のみでなく永遠に結び固められるように、権能の回復をもたらしたのである。なぜなら、結婚は死が世に入り来る以前に定められ主の目的に従って永遠のものとなるように計画されているからである。



予言者 エライジャ

十二使徒評議員会会員
ハワード・W・ハンター

少し以前に、私はある著名な人物が現代の若者の傾向について話しているのを聞いた。今日の若者は両親の歩んできた道から逸れつつあるという事実には彼は論点をおき、現代社会の変革によって子供がその進む方向を誤っていることを憂慮している親が多いことを語った。

彼はかなりの時間を使って、新しい世代の人々とその両親の間の、現代の家庭における「世代の相違」について論

じた。その時彼は若人の側に立ち、世が実際に発展するためには、この世代の相違がなければならぬと主張した。両親は過去の世代に属しており、我々は新しい思考、新しい考え方、および古い考え方の変更を必要としている。もし子供たちが両親と同じ過程を進んだら、決して進歩がない。それであるから、我々は既成の方法に反する現世代の行動によって、強いられてでも新しいものを受け入れなけ



ればならないというのが、彼の言い分であった。彼はこのように問いかけた。「試みられ、ためされなくて、古いものが新しいものより良いと、だれが言えるでしょうか。」

彼はさらに話を続け、両親と若人の間の不和、不一致が永遠のものであってはならないと語った。それは、両親が子供たちの理想と努力をもっとよく理解し、子供たちが両親を一層よく理解し、よりよい関係を築く準備としての新

しい考えと過程を与える一時的なものにすぎない。両者のつながりは、賢明な妥協によって不一致が解消された時、若人と年長者の一致が図られて強くなるのである。

続いて、この論題を支持するものとして聖句から引用された。旧約聖書の最後の書の節が読まれた。

「見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エライジャをあなたがたにつかわす。彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもって地を撃つことのないようにするためである。」(欽定訳マラキ4:5-6)

父の心を子供たちに、子供たちの心を父に向けさせるためにエライジャが送られるという、マラキ書のこの聖句ほど、旧約聖書の研究家たちに解釈上の問題を与えた聖句はほかにない。主の大いなる恐るべき日の前に来ることになっている預言者エライジャとは、だれであろうか。彼の人生における注目すべき出来事について振り返ってみよう。

エライジャに関する最初の記録では、彼はガリラヤ地方のヨルダンの東方、ギレアデのテシベの出であると述べられている。彼が関連した出来事は、キリスト誕生前の9世紀に起こった。この偉大な預言者は、バアルの崇拜をすすめていた人々に対し、イスラエルの真の神としてエホバを擁護した指導者たちの1人であった。彼の生涯に多くの奇跡が起こされた。

エライジャは、アハブ王にかんばつがあるだろうと予言をし、実際その地にかんばつが起こった。予言者エライジャはヨルダンの東にあるケリテ川のほとりに住んだ。彼はその川から水を飲み、主は朝夕からすに彼を養わせたもうた。かんばつのためにその川はかれ、彼は別の避け所を求めた。

すると主は、独り息子と一緒に暮らしている貧しいやもめのもとに彼を導かれた。エライジャは町の門で彼女を見つけ、水とパンとを求めた。そこでやもめは言った。「あなたの神、主は生きておられます。わたしにはパンはありません。ただ、かめに一握りの粉と、びんに少しの油があるだけです。今わたしはたきぎ2、3本を拾い、うちへ帰って、わたしと子供のためにそれを調理し、それを食べて

死のうとしているのです。」(列王上17:12)

エライジャは、恐れないように、また粉は尽きず、びんの油は絶えないだろうと彼女に言った。彼らは長いかんばつの間それによって暮らした。

この時、やもめの息子が病気になり、死にそうであった。エライジャは主に呼び求め、その男の子は再び息をふき返し、命を与えられた。

やがて、主がエライジャに現われて、アハブ王のもとに行つてかんばつが終ることを告げるように彼に言われた。アハブは、バアル神が崇拜されたツロの王の娘、イゼベルと結婚した。彼女は宗教を携えて来て、ヘブル人にバアルの教えを伝え、ヘブル人の宗教とイスラエルの神に対して攻撃をかけた。

エライジャがかんばつの終りをアハブ王に告げに行つた時、アハブはイスラエルが受けている苦悩のために彼を非難した。そこでエライジャは、主の戒めを捨ててバアルに従ったことを責めた。そして彼は、イゼベルに支持されたバアルの予言者たちに挑戦し、カルメル山に来て、主が神かバアルが神か決めようと言った。

アハブはその地にイスラエル人を集めた。そして人々が見守る中で、エライジャはただひとり、バアルの450人の予言者に立ち向かった。そこには、2つの祭壇、すなわち1つは主のために、もう1つはバアルのために祭壇が築かれ、火のついていないたきぎの上に供え物の小牛がおかれた。そして、火をもって答えられる神が神として認められることとなった。450人の予言者がまず始めた。彼らは朝から昼までバアルを呼び求めたが、何の答えもなかった。彼らは狂ったように祭壇のまわりで踊り、刀とやりで身を傷つけ、血を流した。しかしまだ答えはなかった。

次にエライジャの番となった。彼は、彼が準備した供え物に水を注ぐように求め、次のように言った。「『アブラハム、イサク、ヤコブの神、主よ、イスラエルでは、あなたが神であること、わたしがあなたのしもべであつて、あなたの言葉に従つてこのすべての事を行つたことを、今日知らせてください。主よ、わたしに答えてください、わたしに答えてください。主よ、この民にあなたが神であること

またあなたが彼らの心を翻されたのであることを知らせてください』。そのとき主の火が下つて燔祭と、たきぎと、石と、ちりとを焼きつくし、またみぞの水をなめつくした。民は皆見て、ひれ伏して言った、『主が神である。主が神である』。」(列王上18:36-39)

雲と風が起こつて空が黒くなり、大雨が降つて、かんばつが終わった。

イゼベルは怒り、エライジャをおどした。そこで彼は南のベエルシバへ逃げて行き、シナイの荒野にはいった。その荒野での主との出会いは、メンデルスゾーンが美しいオラトリオ「エリヤ」の音楽にした、あの主題となったものである。

山の上で、彼は強い風を感じた。シナイの岩は砕け、地震と火があつた。その後に、静かな主の声が聞こえた。

「エライジャよ、あなたはここで何をしているのか。」そこで彼は答えた。「イスラエルの人々はあなたの契約を捨て……わたしの命を取ろうとしています。」(列王上19:9-10) エライジャを捕えるために兵士たちが送られたが、彼は天から火を呼び、彼らを焼き尽くした。

エホバの偉大な擁護者であるエライジャとその友エリシャは、一緒にエリコからヨルダンに向かった。エライジャは外套を取り、水を打った。すると、水が左右に分かれたので、ふたりはかわいた土の上を渡つた。

「彼らが進みながら語っていた時、火の車と火の馬があらわれて、ふたりを隔てた。そしてエライジャはつむじ風に乗つて天にのぼつた。」(列王下2:11)

エライジャに関する話は旧約聖書の中にあり、新約聖書にも彼についての話が引用されている。しかし、さらに啓示が与えられなければ、我々は彼の使命とマラキが述べた約束の意味について理解できなかったであらう。天使モロナイが予言者ジョセフ・スミスに告げたこの神権時代の最初の啓示では、マラキが用いたとほとんど同じ言葉が繰返されており、エライジャがやがて来ることになっていたことが示されている。

その8年後のカートランド神殿献堂の数日後に、ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリが神殿で一緒に祈っていた

た。するとその時、驚くべき示現が開かれた。教義と聖約110章に記録されている中から数節を読もう。「われらの心より覆い取去られて覚りの眼開かれたり。」

主が教壇の胸欄に立ちたまひ、彼らに話しかけたもうた。次にモーセ、エライヤスが現われた。さらに次のように記録されている。

「この示現閉じらるるや、また別の雄大にして栄光ある示現突如開かれたり。すなわち、死を味わうことなく天に上げられし予言者エライジャわれらの前に立ちて曰く、見よ、ここに於て正にその時は全く至れるなり。そは嘗てマラキの口によりて言われしことにして、すなわち主の大いなるおそるべき日の来らん前に、彼（エライジャ）遣わさるべし。すなわちエライジャ来りて先祖の心に子らを思わせ、子らの心に先祖を思わせん、然らずば、全地は咀いをもて打たるべし、と言われしことを証する時なり。」（教義と聖約110：13—15）

過去数世紀の間に、多くの人々が生を受け、福音の知識を持つことなく死んだ。この知識を持たない人々はどのように裁かれるのであろうか。ペテロは、キリストが十字架にかけられた後、このように言っている。「霊においては生かされ……彼は獄に捕われている霊どものところに下って行き、宣べ伝えることをされた。」（Ⅰエペテロ3：18—19）「死人にさえ福音が宣べ伝えられたのは、彼らは肉においては人間としてさばきを受けるが、霊においては神に従って生きようになるためである。」（Ⅰペテロ4：6）このように、福音の知識なしに死ぬ人々は、それを聞いて受け入れ、バプテスマを受ける機会を持つのである。

地上に生を受け、バプテスマの機会なしに死んだ人々が永遠に亘ってその機会を失うということは、理に適っているであろうか。生者が死者のためにバプテスマを執行することに、何か不合理があるだろうか。おそらく死者の身代りの業について最も良い模範を示されたのは、主御自身である。主は、死ぬすべての者が再び生き、永遠の生活を送れるように、身代りの贖いのためにご自身の命を与えられた。主は、我々が自分自身でできないことをして下さったのである。同じように我々は、この世の生涯で機会を持た

なかった人々のために儀式を執行できるのである。

死者のために執行されるバプテスマのみでなく、エンダウメントも、結び固めもできる。結び固めによって、妻は夫の永遠の伴侶となり、子供たちは家族として彼らに結び固められる。家族単位の結び固めは、神の家族が完全になるまで続く。これが時満ちたる神権時代の大きい業であり、これによって、先祖の心は子らに、子らの心は先祖に向けられるのである。神の家族の結合と贖いは、地の基が置かれる前からの、神のご計画であった。

からずに養われ、尽きない一握りの粉とびんの油によって生活した、その同じ予言者が、マラキの予言通りにこの時代に現われたことを、私は証する。やもめの息子を生きかえらせ、供え物を火によって焼き尽くし、火の車であらわれられたのも、この人である。エライジャは、この時代と過去の時代の人々の心を相互に向けあわせている。

この神権時代に神殿が建てられ、エライジャが訪れるまでは、過去の家族を探して明らかにしようという関心はほとんど持たれていなかった。しかし、神殿が建てられた後世界の系図に対する関心は加速度的に高まってきた。45カ国を代表する数百名の人々が、世界記録会議のためにソルトレーク市に集まったことは、この関心が高まっている証拠である。

現代の若人の傾向について語った人物の言葉に戻ろう。末日におけるエライジャの使命は、両親と子供たちの不一致をなくし、家庭の平和を取り戻し、「世代の相違」を解消することであるというのがマラキの言葉の意味であろうか。もちろん、否である。現代の啓示は我々に真の意味を伝えている。その問いに対する答えとして、ジョセフ・スミスの言葉をここで読もう。

「……我々が死者を贖い、天にいる先祖と我々自身を結び合わせ、第一の復活によみがえるよう結び固めるのは、このエライジャのみたまによるのである……」（教会歴史第6巻 P. 252）

エライジャのみたまが我々の心に大きな影響を与え、我々を神殿に向かわせたもうように、へりくだってイエス・キリストのみ名によって祈る。アーメン。

「こはわが
愛子なり」

七十人最高評議員会会員
ローレン・C・ダン

教義と聖約第68章には、よく耳にする言葉が記されている。「また、シオンまたは組織せられたるシオンのステーキ部内にて子供を有する両親あらば、その子供八才の時、悔改め、生ける神の子キリストの信仰、バプテスマと按手による聖霊の賜などの教義を教えて理解せしめざれば、罪その両親の頭に留るべし。およそシオン、またはその組織せられたるステーキ部内に住める者の律法はかくの如し。またその子供たちは八才の時彼らの罪の赦しを得さするバプテスマと按手とを受くべし。また両親はその子供たちに祈ることと、主の前に正しく歩むことを教えざるべからず。」(教義と聖約 68:25—28)

我々がこの神聖な責任をつとめる助けとして、主は家庭の夕べを啓示された。しかし良い家庭の夕べの根本には、両親とその他の家族員との良い関係がなくてはならない。

たとえば、父親と子供たちの特別な関係、すなわち、初めに本能として与えられ、のちには愛と親切と思いやりによって育まれ、伸ばされる、愛と深い感情とから生じる関係は、全世界どこを捜してもこれ以上にすばらしいものがない関係であると、私は信じている。

私はここで、父親と子供たちとの関係についてお話したい。私は決して母親の大切な役割を軽視するわけではないが、私はその観点から話をする資格にあてはまらないと感じるのである。そればかりでなく、私は、いわゆる教会の母親たちは、家族を地上の天国とな

すに大切な両親と子供たちとの絆をかたくするため、父親たちの助力をさらに必要としていると深く感じているものである。

全人類の贖いと救いの計画が、父なる神と御子イエス・キリストすなわち父と息子の間で実行されたという事実、私は深い印象を受けた。

また、ジョセフ・スミスの話の大切な箇所は、天使モロナイが少年ジョセフに、行って父親に事の次第をすべて話せと命じたことであると私は信じている。

イエス・キリストの福音の回復の際にも、主は注意深くも少年ジョセフと父親との関係を認めたまい、その関係が何によっても損われないようにされたのである。たしかに、父と子の交わりは特別大切なものである。子供の行く末はいつも予知することはできない。また、最良の環境のもとでさえ、家族のだれかを迷いへ誘う出来事が起きることもしばしばである。そのようなことは理解できない時があるが、それにもかかわらず、父親の変わらぬ愛、若い人々が理想や標準の相克の間で自分を見つめようと努める時に経験する挫折感を静める愛のゆえに、人生を良い方へと変えられた例は1つにとどまらない。

ある評論家が現代の若者の典型を次のように描写した。「彼は強く、美しく、勇敢、……悪ずれしないボーイ・スカウトでなくてはならないと言われる。また、ビール、タバコ、クレジット、ハワイ旅行の宣伝広告に埋まっている。少女は、超特大のハリウッドの女王のようにならなくては退屈な人

間になると言われる。自分は理想とかけ離れていると考える時、そのかわいそうな子供が悩むのは疑いない。若い人の心を楽にすることは至難の業である。気にしなければいいと言っても、事実気になるのだから何の効果もない。しばらくの間だけだからと言っても、何の甲斐もない。しかし、もし若者が、自分と自分の前に示されている誤った理想との相違を間違えて受けとらずに、人並の人間としての価値を持ち、落胆せずにすむなら、それが彼らの助けとなるであろう。」

若者が教会で教えられることと世間から期待されていることの間で、理想や標準の相克に悩む時、非常な挫折感を感じる。そのような時に、父親こそが、それらの事柄の正しい見方を示し、息子や娘が、何が人生にとって大切で、何か大切でないかを理解する手助けをし、彼らを元気づけ、愛し、自分は大切なのだと感じさせ、彼らが自分を取り戻して標準に近づくための助けをなすのである。

ある人が、中年、老年の人は、若者がいかに影響されやすいか、どのようなことに影響されるのかを忘れていたと語っていた。若者は、若さという重大な時期について何の経験も経ていない。我々はみなそのことを認識する必要があるのである。教会の父親が、子供に対して父親になろうとする時、時々ある問題が起きる。教義と聖約第75章で主は言われた、「またわれ誠に汝らに告ぐ、およそ己れの家族を扶養せざるべからざる男子にはことごとく彼をして扶養せしむべし。然もこの者は決して冠

を失うことなし。而してかかる者は教会の中にて働かしむべし。」

(教義と聖約 75:28)

ここには2つの基本的な責任が言われている。家族を扶養することと教会で働くことである。家族に対する父親としてのつとめと、教会における多くの責任とが両立しにくいということで、問題が起きることがある。

それに対する答えとして、集會管理の責任や計画の責任を持つすべての教会指導者は、前もって開会、閉会の時刻を決め、よく計画し、よく構成された集會は、時間を最大限有効に用いるばかりか、出席する兄弟たちが妻や子供たちの支持を受けるため大いに力になるということを認識しなければならない。

よく計画された集會とは、家族が、夫や父の帰宅時間を知っているということを意味する。よく計画された集會は時間を最大限有効に使うので、父親の帰宅時間を不必要に延ばす余分な集會が削られる。よく計画され、運営される集會は、出席する父親と同時にその家族にとっても祝福である。

一方、先ほど読んだ教義と聖約の言葉が示すように、主は我々に家族を扶養すると共に、教会の責任を果たすことをも期待しておられる。

教会の責任の重いことが、父親が家庭をおろそかにする理由であるとは必ずしも言えない。私の父は20年間ステーク部長をつとめた。彼は私が6才の時に召され26才の時に解任された。私は子供時代に父がステーク部長でなかった時のことを、ほとんど覚えていな

い。彼は非常に大きなステーキ部をあずかっていて、多くの時間をそのために費やしていた。

それに加えて、父は新聞社の編集長であり、締切や簡単には引き延ばせない仕事があって多くの時間をそれにとられていた。父にとって1日が17時間、あるいは18時間、19時間であった時は珍しいことではなかったと記憶している。そのようなことで、我々子供たちと父との関係に問題が起こっても不思議ではなかったのだが、問題というものはまったく起きなかった。

父には我々と共に過ごす時間が事実上なかったにもかかわらず、何が父と我々との間柄を密接につないだかを振り返ってみると、それは我々のことを自分の生活に組み入れるという父の能力に負うと思うのである。忙しい時でさえ、父は我々のしていることを知り、深い関心を寄せ、気をつけてくれた。父のした質問や言葉から、我々を誇りに思い、我々を心にかけていつもいっしょにいられなくとも我々のことをよく知っていると感ずることができた。

また私は、父母がどんなに疲れていても、我々より先に眠ったことがなかったことを覚えている。家に残っているのが私1人になった時も、父母はベッドに入っていた時でさえ私が帰るまで習慣通りに家族の祈りをしないで待っていた。そのような時は、いつも私を祈りに呼ぶのであった。それがどんなに重大なことであったか、私は、両親のベッドのわきで祈る夜も終りになると知った時に、子供っぽく振舞ったことを思い出す。

また我々は、そのような水入らずの静かな晩に、遅くまで大切な話合いをしたものである。父は、私が話したい時にはどんなに時刻が遅くとも必ず喜んで話をしてくれた。父は多くの時間を私と共に過ごしたわけではないが、私の知っているうちで最も立派な人であると言わざるを得ない。

そのことを思い出す時に、我々が費やす時間の長短が問題なのではなく、さらに大切なのは、子供たちを自分の生活に組み入れる能力であると思う。もし我々が心からの関心を子供たちに示すことができ、忙しい時にも子供たちの様子を知っているということを知ってもらえるならば、時間があっても関心を伝えることのできない両親よりはるかによいことであろう。

最後に私は、短時間でも、それは父が子供たちに影響を及ぼす貴重な時間であることを述べたい。合衆国やカナダでは、子供が9才の時には1日のほぼ半分を家で過ごす。子供が18才になれば、学校へ行くため家を離れたり、自分の生活というのを始める。19才の時には伝道に出る。

他の国々では、さらに時間が短いかもしれない。

先日、私はある監督と会った際に、彼の8才になる娘が真夜中に彼を起こして質問をしたということを知った。翌朝彼は少女に、自分は大変忙しくて仕事もたくさんあるから、夜はよく眠らなくてはならないと説明し、真夜中に起こさないでくれると助かると言ったそうである。

少女は神妙に聞いていたが、最

後に少し憤慨した様子で、「はいお父さん、でも、お父さん、わかってないのね。お父さんは監督ですよ。そして私は問題があるの」と言ったという。

この意味で、権威を授けられた監督がワード部の父であるのと同じく、我々が皆自分の家庭の監督であるように。

そして、ワード部の監督やホーム・ティーチャーが、特に父親のいない家庭に心を配るようにと望むものである。

我々が、遅すぎないうちに、今時間をとって、自分の子供たちについて我々のしなくてはならぬこと、したいことをなすように。日々はまたたく間に月となり、年となっていくからである。

歌の歌詞にこのようなものがある。

「この娘が胸に抱いたあの少女？
この子が遊んでいたあの坊や？
いつのまにこんなに大きくなったのだろう。

いつ大きくなったのだろう。

いつきれいな娘に、
いつ背の高い青年に、
小さかったのはついきのうのことではないの。

陽が昇り、陽が沈み、
年はすみやかにたっていく。

季節が季節に続く。

しあわせや涙と共に。」

我々と子供たちとの関係にもう一度心向け、強い絆をつくるよう努力し、我々が子供たちに義と真理と喜びと平安の原則を伝えるべく働く時に、愛する教会の母親をさらに助け、導くよう、イエス・キリストのみ名により願うものである。アーメン。

選 び の 時

十二使徒評議員会補助

エルレイ・L・クリスチャンセン

私は今、心中特別な祈りをいだいている。だれでもが受けられる確信と励ましを必要としている人々に、それを与えられる何かふさわしい言葉が述べられるようにと祈っている。

我々はすばらしい時代に、すばらしい世界に住んでいる。えり抜きの人々が大勢おり、美しい風物に恵まれ、多くの望ましいことが存在する。

しかしまた、現在は、神から与えられた確かな標準や、長い間受け入れられ敬われてきた真理の原則が、多くの人々によって拒まれる時代でもある。確かに今日は、「諸国民が悩み、おじ惑っている時代である。」（参照ルカ21：25）

主が「人々の愛は冷やかになり、不法は満つべし」と言われたが、その時

代がやってきているのだろうか。（教義と聖約45：27）

今日まんえんする退廃を知る時に非常な不安にかられる。ニュースを読み聞く者にとって、犯罪と論争は日常茶飯事のことになっている。世界中で暴動や危機が次から次へと起こり、しかも満足な解決をみていない。

さて聖典は、我々に次のように語りかけている。悪魔は「すべてこのような結社の基であって、また殺人やそのほかいろいろな悪事の基……」であり、（Ⅱニーファイ26：22）

悪魔は「民の心を煽動してあらゆる悪事をさせ、高ぶらせ、その心を誘って権力と威勢と財産とこの世の空しいものを貪らせることに非常に力がある」のである。（Ⅲニーファイ6：15）

このような人々は「主の義を打建てんために主を求めずして、あらゆる者おのが心のままにふる舞いおのれらの神の姿を求むれども、その姿は人の世の像……」を求めているのである。

(教義と聖約 1 : 16)

「かれらはまたイスラエルの聖者である神の能力をしりぞけ、民に向かって言う『われらに耳を傾け、われらの教えることに聞き従え、今日神は無い。主なる贖い主はすでにその御業を成就してその権能を人に譲り伝えたもうた』」(Ⅱニーファイ 28 : 5)

予言者ニーファイは、はるか昔に今日を予見してこのように語った。しかし、ジェームズ・E・タルメージ博士は次のように確信を与えてくれている。

「しかしすべてこのような悪業に於て(心に留めようではないか)サタンはその犠牲者の犯罪によってサタンの為し得る以上に、または神の智恵が彼にお許しになる以上に出ることはできない。そしていつでも彼より勝れた神の力によって阻止されるのである。」

(信仰箇条の研究 P.80, 19項参照)

ある人は尋ねるかもしれない。「ではなぜ神はその全能の力をもって、あらゆる悪の所業に終止符を打たれないのだろうか」と。その理由はもちろん神が述べておられるように、「すべての物事には必ずその反対のものがなければならぬ」からである。(Ⅱニーファイ 2 : 11)

そのような反対の物に対する分別が

あると、悪に対して善を評価できるのである。すべての人には自己の生涯の進路を定める権利があり、主はその権利を否定なされない。

主の目的は、すべての人が神の最大の賜物である永遠の生命に対し備えをするよう、機会をもたらすことにある。人の進歩は、特に反対や逆境に遭遇する時、確固として動ぜずに、喜んで踏みとどまるかどうかにかかるところが大きい。しかし神は、打ち勝てない、あるいは耐えられないほどの苦しみやだれにもお与えにはならない。ある人は病と戦い、ある人は肉欲と、ある人は耽溺と、ある人はねたみやわがままと、ある人は悲しみと戦っている。



私の好きななつかしい歌を、覚えて
いるままに書きとめたので引用した
い。次の一節は希望を与えてくれるも
のである。

「深く行けと召す時は
水は汝を溺らさじ
われ汝と共にあり
汝を助け悩みはらし
祝福の恵み与えん」

(讃美歌96番「主のみ言葉は」)

我々はだれでも善を受け入れるか、
または拒む権利を神から与えられてい
る。

パウロは言っている。「…神は…あ
なたがたを耐えられないような試練に
会わせることはないばかりか、試練と
同時に、それに耐えられるように、の
がれる道も備えて下さるのである。」

(Ⅰコリント10:13)

今の時代は人がふるいにかけられる
時であり、近代の歴史で、これほどま
でにサタンとその手下が神に敵対して
いる時はない。しかし、けさ予言者で
ある大管長が言われたように、我々は
悪魔の火矢(Ⅰニーファイ 15:24参
照)を恐れる必要はない。なぜなら、
我々は皆、それぞれ今まで以上に罪に
巻き込まれないようのがれる力を持っ
ているからである。

我々教会員は、今や各自、常に主の
かたわらにあって、モルモン経で言わ
れているように、人間の虚栄と意志の
弱さと愚かさを避け(Ⅱニーファイ 9
:28参照)、主が召された僕らの勸告
を受け入れ支持し、それに従って確固
とした歩みをする時である。生活を清
め家庭を神聖な場所にしなければなら
ない。

忠実、従順、正直であり、法を敬う

よう(また身を護ってくれる法に感謝
するよう)、すべての人を尊び、主と
その教会を愛するよう子供たちに教え
ねばならない。勇気をもって生活し行
動し、神から与えられた真理と原則を
とりあげてそれを支持しなければなら
ない。なぜなら、人間のきまぐれで、
誘惑に満ちた不信心な哲学に従うこと
は、最も貴重で望ましいもの、平安、
自由、そして救いを失う危険があるか
らである。

「そういうわけだから、神に従いな
さい。そして、悪魔に立ちむかいな
さい。そうすれば、彼はあなたがたから
逃げ去るであろう。」

「神に近づきなさい。そうすれば、
神はあなたがたに近づいて下さるであ
ろう。……」(ヤコブ4:7-8)

今でも安全なことは「わたしに従っ
てきなさい」というイエスのみ言葉を
実行することである。

現在は実にすばらしい時代である。
第一に、回復された福音の中に真理の
光があり、もしその光を用いるなら、
その人々の生活に快い平安と清澄さが
もたらされるからである。主は我々を
ためすために、この世をるつぼのよう
にお造りになり、この世で喜びの生涯
を、次の世ではえある生活を祝福され
よう良きものを悪しきものからふる
いわけする場所としてお作りになられ
た。

「おおよそ主にたより、主を頼みと
する人はさいわいである。」(エレミヤ
17:7)

主は、我々の生涯を成功させるに必
要な成分をお与えくださった。すなわ
ち、主の福音はそれに従って生きるす
べての人に幸福と成功をもたらす完全

な計画であり、靈感に満ちた指導者と
共に教会をお与えになり、我々を導き
戒めるため聖霊による促しを備えてく
ださったのである。

以上のものを、我々はいまだかつて
人類の歴史でみられなかった程に受け
ている。しかし我々は必ずしも秀でた
時代に住んでいるわけではない。我々
は当然そうあるべき姿まで前進しよう
ではないか。言わば「良き船に」身を
まかせようではないか。その良き船す
なわち教会は決して破れることはない
のである。

「神の業、計画、目的が破れ、また
水泡に帰するは共に有り得べからず。

神は曲れる道を歩まず、また右手に
も左手にも曲らず、また宣べし事と違
うところなし。故に、神の道は直くし
てそのふむ道は永遠にか変わぬ一すじ
なり。

破るものは神の業にあらずして人
間の業なるを決して忘るべからず。」
(教義と聖約3:1-3)

ベンジャミン王の次のような約束の
言葉で私の話を終わりたいと思う。

「さらに私はお前たちが神の命令を
守る人々の受ける幸福な楽しい境涯を
よく考えるように望む。ごらん、その
人たちはこの世に関係のあることでも
霊に関係のあることでもすべてに祝福
を受けて、もし最後まで耐え忍んで忠
実であるならば天に迎えられ、とこし
えに幸福な有様で神と共に住めるので
ある。主なる神がこのように言いたも
うたから、以上のことが真実であるの
を忘れずに記憶せよ。」(モーサヤ2:
41)

イエス・キリストのみ名により、ア
ーメン。

犠牲は祝福をもたらす

七十人最高評議員会会員

ハートマン・レクター・Jr.

第141回半期総大会における説教

昨

年秋、主はその予言者を通して教会は月曜日の夜に家庭の夕べを開くことを宣言された。それと同時に、月曜の夕、プロ・フットボールの試合があることも発表されたことは興味深い。フットボール試合の休憩時間に、はたしてどれだけの家族が家庭の夕べを開かれるかと思うことであろう。むろんそれは不可能である。予言者の要望には、非常に大きなある犠牲が求められているのである。

教義と聖約の第4章で、主はみ業に働く資格を示しておられる。それは、「神の栄光をまごころもて仰ぎみて、信仰、希望、慈悲、仁愛の徳を有つ者」と主は言われる。信仰、希望、慈悲、仁愛について、我々は何がしかのことを知っている。それらは非常に重要である。しかし、神の栄光をまごころもて仰ぎみることは、それらの資格の中でも最も大切ではなからうか。

「神の栄光をまごころもて仰ぎみる」とは、一般に犠牲を意味している。それは、自分の欲することを際限なく行なわずに主が我々に求めておられることをしなくてはならないという意味ではなく、我々はそれを、主がせよと欲しておられる時に、主の方法をもって行なわねばならないという意味である。もちろん、これは人間の性癖とは相いれない。

我々は今日の世にあって「自分の望むままに」という言葉をよく耳にするが、はたしてこれは目新しい言葉であ

ろうか。それは時の初めから言われてきた言葉ではないかと思う。おそらくそれは言い方が少々変わっただけのことであろう。ルシフェルが主のみところに逆らって自分の望むままを行なったことは確かである。カインは天父の勧告に真っ向うから反対して、自分の思いを遂げた。彼らは主が望まれることにはおかまいなく、自分のしたいことだけを考えたのである。当然のこととして、その行ないは幸福を尺度として、決して益ではなかった。幸福は人間存在の全目的である。予言者リーハイの、「人類が現世に在るのは幸福を得んためである」との言葉にすべてが含まれている。(Ⅱニーファイ2:25)

一方、アブラハムは神から、ひとり児のイサクを主に燔祭として捧げよと言われた。アブラハムにとって、主からの戒めのうち、これほどに従うのがむずかしい戒めはなかったことであろう。しかし、彼はすくくと立ちあがり、息子とたきぎを持ち、示された場所へ向かった。彼はそのまま決意を実行しようとしたが、主の天使がその手をさえぎったのであった。はたしてその行動の報いは何であったであろうか。アブラハムへの主の言葉を聞きたまえ。「……あなたがこの事をし、あなたの子、あなたのひとり子をも惜しまなかったの、わたしは大いにあなたを祝福し、大いにあなたの子孫をふやして、天の星のように、浜べの砂のようにする。あなたの子孫は敵の門を

打ち取り、また地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう。あなたがわたしの言葉に従ったからである。」(創世22:16-18)

我々の主、救い主イエスは、御父の戒めに忠実に従うことにおいて、最大の模範者である。園での大いなる苦悩は、人の決して知り得ない、人とは隔絶したものであったに違いない。ゲツセマネの主は祈られた。「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさってください。」(マタイ26:39) 主は、それがこの世へ来られたおもな目的であることを知りつつも、目前に迫ったことを身に受けたいと願わなかった。しかし、主は御父に言われたことをなしたのである。そしてそれがゆえに、主は「天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。」(マタイ28:18) またパウロの記したように、主は「信仰の導き手であり、またその完成者」である。(ヘブル12:2) 主を受け入れる多くの人、その息子、娘となるのである。

では、それはどのようにしてであろうか。それは、ただ犠牲によってのみ可能である。真実の犠牲は「天の祝福をもたらす」のである。

しかし、それがどのようにして、またどうして起こるかは理解しがたいことのようにあり、本当に理解できる人



は、おそらくごくわずかであろう。おそらくそれは、主のみ業が完成するように、求められている犠牲を進んで払う人が少ないためである。

予言者ジョセフは、信証講義第6章で、このことにつき、最大とも言うべき重大な言葉を述べている。「だれもが得られる知識、すなわち、自分の求めている生き方が神のみところに従ったものであるという知識は、それなくして1人も永遠の生命を得られない神への信頼を、人に得さしむるに絶対必要である。……そして人が自分の求めている生き方は神のみところに沿っているという知識を現に持っていないならば、彼らは意気消沈し力を失うであろう。……人間が永遠の生命を享受すべく神の定めたもうたところは、この犠牲、ただこの犠牲のみによるのである。人が今、神の目になうよいことをしていると知識を実際に持つのはすべてこの世の事物を犠牲にすることを通してである。……

最初の殉教者アベルが、自分は神に受け入れられているとの知識を得たのは、犠牲の捧げ物によってであった。そして義人アベルの時から今日に至るまで、自分は神の目になっていると知るのは、犠牲の捧げ物によってであった。

同様にして主に同じ犠牲を捧げ、その捧げ物によって、自分は主に受け入れられていると知るのでなければ、自分勝手にすべてを犠牲にしてきた人々

と共に自分も受継ぎを得られるとの盲想を抱いても、無益なことである。

犠牲を捧げる人々は、自分の道が神の目にかなうとの証を得るであろう。

しかし、この犠牲を神に捧げない人々は、自分の求める道が神の目にかなうという知識を得ない。なぜなら、その信条、意見がどのようなであろうともそれは心中不確かで疑わしいものであり、疑惑や不安のある所には信仰が存在し得ないからである。疑惑と信仰は同時に同一人の中に存在しない。それゆえ、心を疑惑や恐れに占められている人々は、ゆるぎない信頼を持つことができない。そしてゆるがぬ信頼がない所では信仰は弱く、信仰が弱ければ、人は、キリスト・イエスと共にゆずりを受け継ぎ、神の後継者となるために立ち向かわねばならないあらゆる障害物、辛苦、苦難と戦うことができない。彼らは心弱り、敵は彼らを支配する力を得、彼らを滅ぼすであろう」

(信証講義、1891年版、6：2，4，7，8，9，10，12)

これからわかるように、いかに心に添わないものであろうとも、犠牲は絶対に必要である。なぜなら、それこそ主の子らが永遠の生命を享受すべく主の御前に無事帰るに必要な信仰と確信を得るために、主の備えたもうた唯一の手段だからである。

さて、現代の犠牲とはどのようなものであろうか。我々が犠牲という言葉

のために命を捨てられた救い主のように他人のために命を捧げる人のことを思い浮かべる。それは確かである。しかし、主が現代の子らを祝福するために定められた近代の犠牲も確かに存在するのである。その幾つかは以下のものであろう。

什分の一：物価が急上昇し、インフレが激しい現代である。

知恵の言葉：あらゆる種類の刺激物の摂取が全世界を通じて日常茶飯事になっている現代である。

純潔に道徳的に清く生活する：売店や映画など、あらゆるところでこの原則が踏みにじられている時代である。

伝道に出る：伝道に出ることで、青年男女の学業が中断され、時には兵役に早期召集される。

私は、伝道に出ることに關して先日19才の青年と面接をした。私が、これは主があなたに望まれることですよと言った時、彼は「でも、レクター長老、もし伝道に出たら、学校をやめなくてはならないのですね」と言った。私はこのように答えた、「そうです。その通りです。しかし、今あなたのステキ部で働いている12人の青年たちはそのようにして、友人を何人も教会に導いています。」

家庭の夕べを開く：数多い娯楽のうちでもプロフットボール試合のある特別な月曜日の夜に家庭の夕べを開くことは、1つの犠牲と言えよう。

兄弟姉妹たち、確かに、犠牲はこれ

まで同様現代でも、神の国になくはないものである。犠牲は、その上天の祝福をもたらす。犠牲なしでは何の祝福もないのである。しかし、ただ祝福を得るために仕えることは正しくない。奉仕は、我々が主を愛し、主の子らを愛するゆえになされるべきである。

我々が神の栄光を仰ぎみて、自分の欲することを際限なく行なう代りに、主が我々に望んでおられることをなすよう、そして、主を愛するがゆえにそれをなすよう祈りたてまつる。

私は、神が生きておられることの証人である。私は神が生きておられ、祈りを聞き、答えたもうことを知っている。主は私の祈りを聞き、祈りに答えたもうたからである。私はあなた方に、イエスがキリストであり、生きておられると証する。私はイエスが生きておられること、その教会を我々の時代にすばらしい人物、偉大な予言者ジョセフ・スミスを通して地上に再建されたこと、そして今日地上には、今朝声を聞いた神の予言者ジョセフ・フィールディング・スミス大管長がいること、また、この教会は神の教会、神の王国であること、この教会にあっては我々の主、救い主、その教会が現に存在するイエス・キリストの指揮のもと啓示によって決定がなされることを知っている。私はこの証をありのままにイエス・キリストのみ名により申しあげる。アーメン。

働くよろこび

ウェンデル・J・アシュトン

先週、私と妻のベルバは、もう一組の夫婦を誘い、車で45マイル離れた町で開かれる夕食会に出かけることになっていた。

出かけるすぐ前になって、彼らは遅れるとの電話をよこした。「新聞の機械が故障して、息子たちが配るはずの新聞がおそく来るというのです。新聞が来るのを待って私たちの車に積んで、息子たちが配れるようにしなくてはならないですよ。新聞が集配所に到着しだい、すぐ電話します。」

はじめ、彼の声はいくらかあわてた様子であった。しかし私たちが彼らの家へ着き、3人の息子たちが忙しそうに配る新聞の用意をしている姿を見た時（最年少の子は8才である）私たちの気持は賞賛に変わっていた。

この両親は、第一のもの、すなわち息子と息子たちの仕事を第一にしたのである。

その父親は技術にも法律にも学位を持つ立派な実業界の指導者で、以前にはステーク部長をつとめていた。母親はステーク部扶助協会会長である。私にとって、そのようなことよりさらに印象的なのは、9人の子供たちに幼い時から労働の喜びを教えたということである。

年少の時から仕事を愛することを学んで、彼らの生活はより幸福により健康的になるに違いない。

いつか、私はマイアミ新聞で、年令165才と言われている今は隠居した羊飼いの老人との会見記を読んだことがある。名前はシラクー・ミズリモフと言った。彼はトルコとロシアとイランが境を接する黒海とカスピ海の中間地方にあるコーカサス山脈で生まれ育った。コーカサス山脈は5,632メートル



の高さで、3,000メートルの高さまで山道が幾つも通じており、ちゃんとした道路もある。

ミズリモフ氏は、今も木を切り倒しているという。彼は「怠け者は長生きできない」と記者に語った。彼の家はロシアのアゼバイジャンの海拔2,000メートルのバルザブにある。

その記事では、老人がいまだに「これまでに幾度も植え変えた果樹園の木々を掘り起こしている」と書かれている。

「いつも働くこと、山の空気、それから適度に食べたおかげで、こんな年まで生きられたのです」とミズリモフ氏は語った。彼は酒を飲まず、タバコもすわず、鳥のスープとチーズとエアレンと呼ばれる凝乳を食べるだけである。

メトセラは人類史上最も長く生きた人である。彼が969才で死んだことの他に、聖書はほとんど彼のことについて触れていない。創世記には、その孫であるノアがメトセラとほぼ同年令の950才に達したと記してある。創世記には「神と共に歩んだ」予言者ノアについてより多くのことが言われている（創世6：9）

ノアは働くために生まれたようであった。レメクは彼をノアと名付けて言

った。「この子こそ、主が地をのろわれたため、骨折り働くわれわれを慰めるもの。」（創世5：29）

ノアは建造者であった。彼が600才の時、箱舟は完成し、洪水が襲った。

神が地をのろわれたというレメクの言葉は、主がアダムに語られた言葉を思い出させる。主は、「……地はあなたのためにのろわれ……」（創世3：17）、「あなたは顔に汗してパンを食べ……」（創世3：19）と言われた。

主はアダムをのろわれはしなかった。地を「あなたのために」のろうと言われたのである。代々を通じて、人は顔の汗からパン以上のものを受けてきた。それは幸福である。

ペルシャの屈強な政治家ビスマルクは、ある時「若者に呈する言葉を私は3つしか持っていない。働け、働け、働け」と語った。

小さな兄弟たちがほこりにまみれて新聞をたたんでいる姿を見ることは、何と喜ばしい光景であろう。彼らはノアにならないかもしれない。しかし、賢明な愛ある両親に労働の喜びを早くから教えられた彼らの人生は、より豊かにみがかれ、人生のたそがれ時も延ばされ、輝かしいものとなるに違いない。



「愛もて互いに仕えよ」

七十人最高評議員会会員

S・デルワース・ヤング

私の言葉を主のみたまが導いたもうことが、私の願いである。多数の教会員、実際大勢の人々が活動できるために、教会のワード部や支部が組織されているが、それでも、組織で役職や責任を持って正式な召しに携わっていない人が大勢いる。彼らは教会に属し、ステーク部に属し、ワード部に属している。そしてさまざまなクラスや集会に出席して学ぶが、会が終れば、組織の活動に特別な役目を持たず帰宅するのである。彼らの多くは自分を取り残されており自分の能力が求められてはいないと感じている。またその他の人は責任ある召しを受けたくないと思っている。

それは、彼らがイエス・キリストの教会に対する自分の責任というものを理解していないために起こることである。我々はみな同じ召しを受けている。我々はみな、水のバプテスマを受けて誓約を交わした結果として、同じ責任を持っているのである。主は、もし我々が組織の責任によって、あるいはそれを受けないことによって、この特別な召しを妨害することになるとしたならば、我々を罪なしと

はされないであろう。予言者の言葉によって、大切な責任をいくつかあげてみよう。

エレミヤは反抗的で不従順な民に言った。「異邦の人（エレミヤはこの時代にこう言わねばならなかったであろう）孤児、寡婦を悩まし、しえたげてはならない。」（エレミヤ22：3）

彼はある王を賞賛して言った、「彼は貧しい人と乏しい人の訴えをただして、さいわいを得た。こうすることがわたしを知ることでないかと、主は言われる。」（エレミヤ22：16）

このような考えを、主はのちにミカを通して繰り返し言われた。ミカは民に、必要なことは「公義をおこない、いつくしみを愛し、へりくだってあなたの神と共に歩むことではないか。」（ミカ6：8）と語った。

パウロは聖徒たちに、互いに親切に、やさしく、ゆるし愛しあえと言った。（エペソ4：32）

アルマはさらにくわしく述べている。彼は自分たちの活



動や持ち物一切について、また自分たちのため、他の人のため、主に祈れと勧めた。彼らの良い態度は、彼らの持つすべての物、自分のこと一切について主に祈ったことに示されている。その時アルマは言った、「……これで満足だと思っはいけない。たとえこれらのことをみな行なっても、もしも貧しい者や着る物のない者の願いをことわり、病んでいる者、あるいは悩んでいる者を見舞わず、持物がありながらその幾分を貧しい者に施さないならば、あなたたちの祈りは空しくなってその効果はなく、またあなたたちは神の言葉を否定する偽善者になるであろう。それであるから、もし忘れずに慈善を行なわないならば、あなたたちは金銀を精製する人たちに（価がないから）棄てられて、人の足で踏まれる鉄かすのような者である。」（アルマ34：28-29）

このことについてジョセフ・スミスに与えられた啓示は数多く、初期の啓示の中によく見られる。貧しい者の世話第一の、そして緊急を要する仕事であった。乏しい者と

悲しむ者とを助けることはすぐあとに続く仕事である。

我々にはいくらかの時間があるが、各組織で大きな責任を与えられていない人々は、貧しい者、乏しい者、身寄りのない者を捜し求める時間をもっとある。

この援助は、非常に必要である。我々のまわりにいる人々は、みな励ましや支えや援助、すなわちお金ではなく、時間や注意や個人的な励ましなどによるだれにもできる援助を必要としている人々である。愛する者たちのために果たすべき大きな責任のある人、他にだれも世話をする人がいないため、自分でどうしても世話しなくてはならないという人々にとっては、特に大切なことである。

病気の子をかかえた若い母親をもしだれかがしばらくの間手伝ったならば、どんなに助かることであろうか。少しの時間、ただ5分間と限らず1時間でも、本を読み、手伝い、食事を食べさせ、あやしてあげたら、彼らの態度は変わるであろう。あなた方は多くの家庭で助けを必要としている人を見出すに違いない。

私がかつて病身の婦人を引き受けた時、ある善良な1人の婦人がこのように言った。「私は、毎週金曜日の夜、6時から10時までお宅へ行きます。あなたはそれを予定に組んで、その4時間で他に手を必要な人をさがしていらっしゃるができますもの。」私に対する何という心づかいであろうか。何とやさしい心であろうか。彼女は新たな笑みと新たな喜びと新しい考えを、私と病人に恵んでくれたのであった。

寂しい人々、寂しさを内に隠している人々は大勢いる。我々は彼らを捜し出して、助けなくてはならない。自分は受け入れられないと感じている人、霊的に強くされて自分を見出さねばならない人々がいる。だれも心に掛けてくれないと考えている1人暮らしの女性がいます。心に問題を持つ人々がいる。家庭の夕べは、寂しそうな人、引込み思案な人、落胆している人、心に問題を持つ人などを、時折り招くにふさわしい時である。

私は、教会の大きな責任を持っていてワード部の責任は受けていない1人の人を知っている。彼女は毎週日曜学校と聖餐会に出席し、自分はプログラムに入りこめないという思いをいだいて帰宅していた。そういう日曜日、この福音を知らずに育った一人の姉妹が、教会のドアの前まで来ながら、入りにくそうな様子で家に引き返そうとしているのに気がついた。彼女はその姉妹に声をかけて中に入れてやり、彼女の心を開く手伝いをした。また、もうすぐ改宗しようとしている男性に気づき、教会員となる手助けをした。彼女は目的のない独身の姉妹たちに心をかけ、彼女たちに理想をめざす望みを植えつけた。また、年とった人々に関心を寄せ、伝道に出る年齢の間近い若い人々には励ましを与えた。そうするうちに、彼女はふと、監督の召しによってではなく、兄弟たちの守り手となりなさいという律法に従うことによって、自分がワード部の大切な一員となったことに気がついた。

大勢の子供がいたり、病人がいたり、年寄りがいる家庭のほとんどが援助を必要としている。あなた方聖徒たちよ、会長会や教師の責任にないからといって、ひきさがってはならない。努めて善き業に従い、多くのことを自由意志によってなし遂げよ。慰め、助け、注目を必要としている人々に慎みある援助をすることによって、あなた方は天国により近くなるであろう。あなた方は組織にとって重要であると感じられないかもしれない。だが天使たちは、主が愛しておられる貧しい人、しいたげられている人、乏しい人、病気の人、心弱っている人のために尽くす教会奉仕の時間を、ほほえみながら記録するであろう。

我々はみな教会の働き手である。特別な責任のある者もない者も、毎週祈りの家へ行き、彼らの捧げ物を捧げよと

啓示によって命じられている。その時我々は、救い主である御方を覚え、その戒めを守り、第二の戒め、すなわち自分を愛すると同様隣り人を愛するとの戒めを守るという誓約を新たにするのである。この誓約を交わした以上、行ないによってこの愛を示すことは我々の責任である。

ワード部の責任を持たない人々は、人を救うこの偉大な働きに携わる時間が余計にある。ただうしろにすわってステーキ部、ワード部、補助組織で表だって活躍する人たちをうらやんでおらずに、心の弱まっている人、体の弱い人、希望を持たない人、励ましを必要としている人、この地上の神の王国の中であって成長しなくてはならない人々の間に出で行き、主が我々に課せられた仕事をなしつつ、救いを求めようではないか。

私は、ホーム・ティーチャーがそれらの人々について責任を負っていることを知っている。しかし、家にいる人たちは、彼らに隠して言わないことがある。訪問教師があることも知っている。しかしそれでも、黙っている人は多いのである。神権者たちが気をつけているべきであることも承知しているが、この責任は神権組織を越えた責任である。これは、主を愛する人ならば決して見過ごしにできない個人的な義務である。我々が常に気をつけているべき責任である。

助けを必要としている隣人は隣りにいるかもしれない。援助を求める人は、教会員でないかもしれない。だれが困っているかわからないのである。誇りを持つゆえに、あるいは手段に欠けるゆえに、援助を非常に必要としていながら苦しい状態を監督に報告しない多くの人々に対して、理解と愛を持ち、個人的に励ましと援助の手をさしのべる責任のないという人を、私は知らない。

ヤコブの言葉が心に響いてくる。「父なる神のみまえに清く汚れない信心とは、困っている孤児や、やもめを見舞い、自らは世の汚れに染まずに、身を清く保つことにほかならない。」(ヤコブ1:27)

この時代に主より与えられた最後の言葉の中から読んでみよう。「また汝ら貧しき者、乏しき者および病める者、悩める者たちを万事に憶えて憐れむべし。これらの事を為さざる者はわが弟子にあらざればなり。」(教義と聖約52:40)

私はイエス・キリストが生きておられ、聖なる御父も生きておられることを知っている。私はジョセフ・フィールディング・スミス大管長を生ける予言者として心より支持するものである。そして、私は人が主を愛することは隣人を愛し、仕えることであるという命令に従う時、与える者にも受ける者にも祝福がもたらされることを知っている。イエス・キリストのみ名によって。アーメン。



小石のスープ

レオーネ・キャステル・アンダーソン

絵：ジェリー・ハーストン

老人が入口に立っていました。服は古くてみすぼらしいものでしたが、ひげやかみはきちんとといてありました。

「食事をいっしょにですって？」その家の母親はつめたく聞きかえました。「私たちでさえ十分な食べ物がないっていうのに。こじきに用はないわ。」

彼女が戸をしめようとした時、老人はまた話しました。「たぶんあなたをお助けできると思うんですが。」

「助けるって？どう助けてくださるの。ほねや食べかすぐらいしかないのよ。オルガ、キャサリン、戸だなの中に何か残っていたら持ってきてちょうだい。」

女の子がテーブルの上においた野菜の小さな山を母親は指さしました。「おわかりになりました？ にんじん1、2本にじゃがいもが少し、それにたまねぎです。5人のお腹のすいた子供に食べさせるのにどうするというのですか。父親は食料を集めに旅に出ました。しかしまだもどりません。」母

ピーター



親は続けて言いました。「さあ帰ってください。私たちを助けることなどできないのです。」

「必要なものは水のいっぱい入ったつぼと、それを料理する火だけです。そして私のまほうの小石で小石のスープを作ります。」老人は言いました。

「小石のスープですって？」母親はようやくことばを続けて、「味はするでしょうけれど」と言いました。

老人は手をあげました。「1つお願いがあるんですが、あの火のそばのテーブルにすわらせてもらえないでしょうか。」

それから、子供さん一人一人を私のところにこさせてください」とかれは言いました。

一番上のピーターが最初にやってきました。かれはただお湯がつぼのふちのまわりでふっとうしはじめるのだけが見えました。

「あなたの中にはよいものがあります。あなたはここで必要とされているため一番大切な人です。あなたは自分の強さを他の人に分け与えるでしょう」と老人は言いました。

その老人は、テーブルの上からとるほねに話しているように思えましたが、かれがいったことは、ピーターにはよくわかりました。

それもそうだ。お父さんは行ってしまったしそれにぼくは一番上なんだから、お母さんはぼくとぼくの強さが必要なんだ、とピーターはそう思いました。かれはいつけなくとも火をもすためにまきを走って持ってきました。そして木の箱の中にまきを注意深くつまあげはじめました。老人はつぼの

女が思ったようなばかりではありませんでした。彼女は一番下のネルスのところに走っていきふざけてかれのまわりをまわっていました。キャサリンはお母さんのためにかれに会うことをいやがらなかったのです。そして老人はつぼの中ににんじんを2、3本そっと入れました。

三番目のエリックは大さわぎしてやってきました。ピーターの耳をひっぱったり、キャサリンの巻毛を力いっぱいむしったりネルスをつついたり、オルガのわき腹をくすぐったりしてやってきました。

「さて、元気のいい子がきた」とかれはつぶやき、「あなたはここになくってはならない人です。自分で知りなさい。」と言いました。たまねぎの皮をむき、こすりながら、かれはこうつけ加えました。「あなたはいじめるつもりでやっているんじゃないんだから。」

エリックは、自分がそうであるとわかっていました。たまねぎのきついにいいためにかれの目になみだ流れるとき、

キャサリン



中にほねを入れました。

次はキャサリンの番です。キャサリンは会うのがいやだったのでふくれっつらをしていました。

「ああ、ここにいいものがあるぞ。健康によくてなめらかで。あなたが行なうことにはみんな明るさが加えられますよ。」

「かれはにんじんのことを話しているのかしら、それとも私のことかしら。」キャサリンは不思議に思いました。彼女の顔は明るくなり、ふくれっつらは消えていました。老人は彼

エリック



いじめたからなみだがでたのだと思いました。エリックはピーターがひっぱられた耳をなでているのを見て、まきをつむピーターの手伝いをしに行きました。老人はたまねぎの皮をむきおわり、つぼの中に入れました。

四番目で器量のよくないオルガは会いにきませんでした。かれはうなずき、「たまに外見は悪いが、とても親切でやさしいのがかくされているものだ。」とまるで手の中のジャがいもに言うように言いました。

オルガの顔が輝きました。老人の目にそううつったのです

から、たぶんほかの人もそう思うでしょう。オルガは美しい姉のキャサリンにしっとするのをはずかしく思い、キャサリのところへ行って楽しくおしゃべりをしました。老人はじゃがいもの皮をむき、小さく切ってにたっているつぼの中に入れました。

ネルスの番になりましたが、ためらっていました。老人をこわいと思っていたのです。まだ小さいので何の役にもならないとだれでもが思っていました。老人はネルスにもっとそばにくるように手招きをして、直接かれに話しかけました。

「あなたはこの質問の答えがわかります。お母さんが食事のために何かおいしいものをつくる時、やかんの中にいつも入れるものは何ですか。」とかれはずねました。ネルスは考えて、「しおかな。そうだおしおだ。」と言いました。彼はテーブルの上に手をのばして塩を老人にわたしました。

「正しい答えだったから、スープを味見させよう」と老人は言いました。



オルガ

ネルスは、背が高くなりました。正しい答えを言ったときからもう赤ちゃんではなくなったのです。

お母さんはにおいをかぎながら歩いてきました。

「スープのようなおいだわ。」彼女はそう思いました。

「親切にいただいたからスープを味わってください。そしてそれにもっと必要なものを教えてください」と老人は言いました。

お母さんは大きなスプーンをすすると、何も考えずにテーブルに手をのばし、つぼの中にこしょうをふりかけました。

「そうです。ぴりっとしたところです。それぞれの最良の味をもたらし、しかもすべてのものに何かをつけ加えます。」かれがこのことをいったとき、お母さんはかれを見ました。自分がきつい話し方をしたことを知っていたからでした。しかし老人はただうなずいて言いました。「できました。」それから主賓の席にいる老人を囲んでみんなでテーブルにすわりました。お母さんは1人ずつゆげのたっているスープをたっぷり分配しました。ちょうど食べ終わりドアの音がするとそこにお父さんが立っていました。食料を入れた袋をせなかに背負っています。

「洪水があったんだよ」とお父さんはおくれたわけを説明しました。しかしみんながむかえようとしてまわりにあつまり一度にこの訪問者と魔法を説明しようとしてしました。

「そうか。この小石のスープを食べてみたいなあ」とお父さんはいいました。最初深ざら1ばいたべてしまったあと、もっとあるかとたずねました。



ネルス

つぼから最後のスープをそそぎながら、「これでおしまいですよ」といいました。それから彼女は老人にふりかえって言いました。「あなたの魔法の小石はもうなくなってしまったわ。」

老人は立ち上がり、ドアの方に行きました。そしてふりかえってほほえみました。「あなた方はそれを見ることができません。そこにあることがわかるだけです。それは愛をよび大きな奇跡を行なうのです。」そう言うとき老人は背を向けて、愛の魔法をあとにのこし、やみの中に出て行きました。

アビナダイ

「私も私の民もかれから裁判されなければならないというアビナダイは何者であるか。またこのように大きな苦難を私の民に下す主とは何者であるか。私がアビナダイを殺すからここにつれてこい。」と罪深いノア王は大声でいいました。

アビナダイはよい人で主の予言者でした。かれはノア王がやった悪いことを見ました。そしてかれはノア王が美しい宮殿をたてるため、民に税をかけて取り上げた財貨を見ました。しかしアビナダイが一番悲しんだことは、王と同じように不正や不信仰な民だとわかったことでした。

そのあと主はアビナダイに民の中に行くようにおっしゃって、悪い行ないを悔い改めなければ民に怒りを下すといわれました。アビナダイは主の言葉に耳をかたむけるようにねがいました。しかしかれらは長い間ノア王に従っていたので、アビナダイにはらをたてました。そしてアビナダイが王や祭司や民に大きな罪があるとおどしたと急いで王のところに上げにいきました。ノア王は怒ってアビナダイをかれの前につれてくるように命令しました。

しかしアビナダイはのがれて、見つかることはありませんでした。2年間かくれていたのです。

それから、アビナダイは、だれにもわからないようにすがたをかえ、民のあいだにあらわれました。主のことばを聞いたアビナダイは、悪い行ないを続ければどれいにされ、殺されてやじゅうがその肉をたべてしまうだろうと民につげました。民はアビナダイに腹を立て、かれをとらえて王のまえに引きつれていきました。王は祭司をぜんぶよび集めて、民の行ないや王に対してはつきりとつげたこの男をどうとりはかるうかきめるために、アビナダイを祭司たちの前につれてきました。

祭司たちは、アビナダイにじんもんし、真実を否定させようとししました。祭司たちが先祖から教わっている聖句のある部分を説明するようにいいました。アビナダイは、かれらは祭司としてふさわしくなく、理解していないのに教えようとしているといいました。そして「あなたらは心を注いで知識

を得なかったから賢くなかったのである」といいました。

祭司たちはアビナダイをとらえようとしましたが、かれはいいました。「私にさわるな。もし私に手をかけるならば神が必ずあなたらをうち破りたもうであろう。私は主が私をつかわして伝えさせようと思ったもうた使命をまだ果していない。」

これらの言葉は、祭司たちをおそれさせました。それは主の「みたま」がアビナダイにみちて、かれの顔がまばゆくかがやいていたからでした。それからかれは力強く話し続けました。

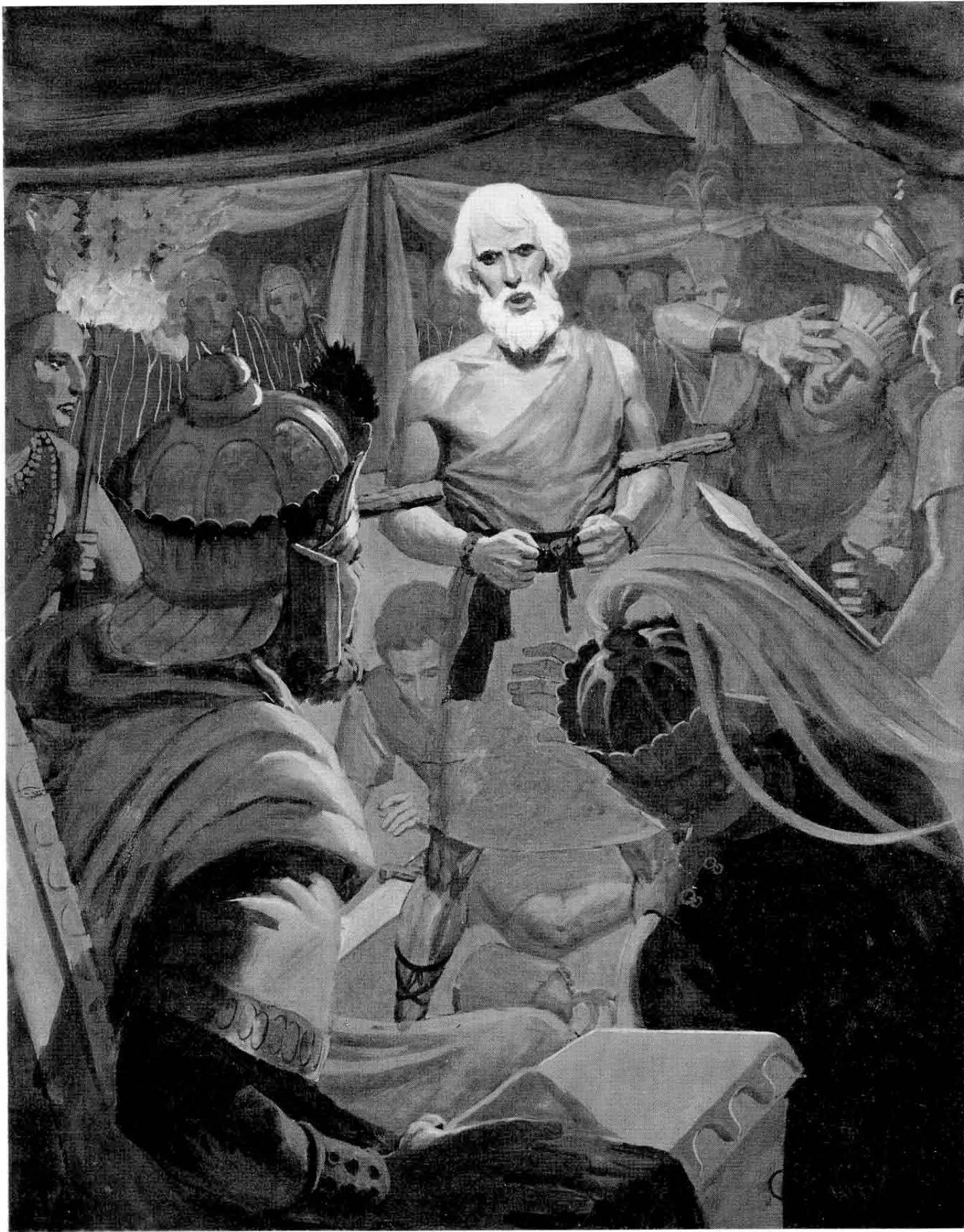
長い間ノア王と祭司たちは、かれの話に耳をかたむけました。アビナダイは、地上に来て、人々の間に住まれる神の御子、イエス・キリストについて話しました。かれはまた、イエスは十字架にかけられ殺されてしまうが、死にうち勝ち、再び生きかえられるといいました。

アビナダイはしばらくあげられ、ろうに入れられました。もしかれがのべたことをとりけさなければ、死刑にすると宣告されました。

アビナダイは、「私は死ぬだろう。私があなたがたに申し上げたことは真実だから決してとりけさない」といいました。

ノア王は神の罰をうけるかもしれないとおそれはじめました。しかし祭司たちは、アビナダイを殺したいと思っていました。それで王はアビナダイを殺すようにいいました。そこで祭司たちは、たきぎをもやしてそのはだをやいて苦しめ、殺してしまいました。炎があがってアビナダイをやき始めるとき、アビナダイはいいました。「神はこのようなその民を亡ぼす者にあだを報いたもう。神よ、わが霊を受けたまえ。」

こういったあと、アビナダイは火あぶりにされて死んでしまいました。神さまの言葉を否定せず、かれは命をささげることによって自分の言葉が真理であることをあかししたのでした。



むちのおど

メアリー・プラット・パリッシュ

絵：バージニア・サージェント



ブリガム・ヤング大管長が、聖徒たちを中央広場によび集めたとき、トミーとベッツィーは小川にいて、朝食のさらをきれいな白い砂でみがいていました。そこで2人はお母さんが用意してくれたお湯でさらをすすぐと、すぐにブリガム・ヤング大管長の話を聞きに行きました。かれのことは、「旅を続けたいと思います。行きたいと思う人は全部私に従ってください」というかんたんなものでした。

トミーは声をあげてよろこびました。そしてベッツィーの手をとって、「ほくたち西部へいくんだ。とうとう西部へ行くんだよ」と言いながらベッツィーをぐるぐるまわしました。ところが、とつぜんトミーはまわすのをやめて言いました。「ほくたちは今西部へ行けないんだよ。お父さんがここにいないから。」

お母さんは、かれががっかりしているのがわかりました。「お父さんは、たぶん明日の午後までにここへ帰ってくる



わ。きょうセント・ジョセフでの仕事が終わるって言ってらしたわ。私たちが準備しているなら、お父さんが着いてすぐに出発できるでしょう」とお母さんは言いました。

トミーは安心しました。ヤング大管長が、500台の幌馬車の長い列に出発の合図を出したとき、たくさんの友だちや近所の人たちに手をふって別れをつげました。幌馬車の列が見えなくなると、2人は急いで家に帰り、出発の準備のために何ができるかをお母さんにたずねました。

「これ、かきまぜてちょうだい」とお母さんはベッツィーに言いました。木でできたバター製造機は、上にふたがあり小さなたろのようなものでした。ふたのまん中のあなを通して、ベッツィーは、クリームが黄色いバターになるまで上下にかきまぜ器のとっ手を動かしました。

ベッツィーがかきまぜている間、トミーはたろに水をいっぱいに入れて幌馬車の外側にむすびつけました。泉か川の近くにキャンプすることができないとき、のみ水としてたくわえておくのです。小川から上がってくると、キャンプ地には

ついに合図がでました。その時バンドは演奏をはじめ、むちの音になり、トミーの幌馬車がまわり始めました。

いってくる幌馬車が見えました。「お父さんだ。」運んでいたバケツをおくと、トミーは走って迎えに行きました。

「お父さんが帰ってきたから、もう西部へ行けるんでしょう。半分以上の人は行ってしまったんだよ」と、トミーはたずねました。

「行くまえにかきまぜるのを終わらなければならないわ」とベッツィーは言いました。

「パンがやけるまで待たなければね」とお母さんも言いました。

お父さんはわらって、「きょうの午後は出発できないね」と言いました。「セント・ジョセフで幌馬車と牛を買ってきた。だからいっしょに働きに行ったものは明日までもどれないが、お父さんはきょうもどれたんだよ。幌馬車にはとうもろこしと小麦がいっぱい積んであるから、上にかぶせるカバーをしゅうせんしなければならないね。」

「新しい幌馬車はだれが動かすの」とトミーはたずねました。

「お母さんができるだろう」とお父さんは答えました。

「ぼくやりたいなあ」とトミーはいいました。

お父さんはしばらくだまっていたましたが、「おまえはやれるだろう。やってみなさい」と言いました。そして牛を幌馬車につながず、たづなのにぎり方や、牛を歩かせるためにけがをさせずにむちをならす方法を教えてくれました。トミーは早く牛を動かしてみたかったので、次の朝早く出発できるように、その日の午後はずっと働き続けました。トミーはおとうさんがセント・ジョセフから持ってきた6本の細長い棒を小川の中にひたしました。やわらかくてしなやかになるとそれをぎょ者台の一方につなぎ、たわませて、もう一方の方につなぐのを手伝いました。2人は大きなあさの布を持ち上げて、たわませた棒の上にかぶせ、しっかりとのぼして両わきに結びつけました。

そのあと、トミーはお父さんが長くて深い食糧箱を作るの



バンドリーダーがトミーのお父さんをみると、
トロンボーンを手渡しました。お父さんが演奏
しはじめるとトミーはうれしくなりました。

を手伝い、2人で幌馬車の片側にむすびつけました。お父さんがセント・ジョセフから持ってきた小さなとり小屋は、6羽のにわとりのためにもう一方にとりつけられました。ベツツィーとお母さんは、毎日使うさらや食物を食糧箱につめて、幌馬車の外側に大きな鉄のやかんをつりさげました。

お母さんは準備したねり粉をこねて、いくつかに分けベツツィーがそれをパンやき器¹の中のまっかにもえている石炭の上で焼いてビスケットを作りました。ビスケットはきつね色をしてふんわりしていました。夕食の準備をしていると、あたりに音楽が流れました。

「ピットのプラスバンドだ」とトミーは大声で言いました。

「そうだ。夕食に何人かを招待しよう。」お父さんも言いました。かれはトミーの手をとり、ノーヴー道路に向かって走り出しました。シュガー・クリークに残っている2千人のほとんどは、バンドの歓迎に参加しました。バンド・リーダーがトミーのお父さんを見ると、かれにトロンボーンを手渡しました。お父さんが演奏しはじめるとかれはうれしくなりました。お父さんがトロンボーンを売る前、バンドの一員だ

ったころのノーヴーでのすばらしい日々を思い出したからです。バンドは広場にまっすぐ行進しました。人々はそのあとを音楽の調子に合わせながら大行進のように続いて歩きました。あたたかい食事を食べたあと、隊員たちは広場で演奏会を開きました。

次の朝、トミーは特別早くおきました。牛を動かすことを考えて、あまり興奮して眠れなかったからです。ついに幌馬車の準備ができ、トミーはお母さんのとなりにすわり、西へ向かう32の幌馬車の小さな列に出発する合図がくだされるのを待ちました。

ついに合図がありました。バンドが演奏され、たづなをはじき、むちをならす音とともに、トミーの幌馬車も動き始めました。幌馬車の中にいる人々は歌い、10マイル先のイスラエルのキャンプの本隊につくまで、その歌はやみませんでした。

1、パンやき器—パンを焼く鉄のかま。その上にぴったりし
まる凸面のふたがついていて、その中に燃え
ている石炭をおくようになっているもの。



マービン・J・アシュトン

十二使徒評議員会会員

ドイル・L・グリーン

1830年に教会が組織されて以来、何万もの男子会員の中から、この神権時代における、主イエス・キリストの特別の証人、すなわち十二使徒評議員として、79人が召された。

使徒は特別なたぐいの人である。それは高い聖なる召しであり、神と同胞に仕えるのに全時間と生活の一切をさ

さげる必要がある。ジョセフ・F・スミス大管長は述べておられる「教会の十二使徒の義務は、世界に福音をのべ伝え、地上の国民に福音を与え、神の神聖な訪れの生ける証人として、神の御子イエス・キリストについて証することである」と。

通常、このような召しは、総大会で

なされるが、事が緊急を要していたことと、各十二使徒評議員が信じがたい程過重な仕事を果たしていたので、79人目に選ばれたマービン・ジェレミー・アシュトン長老は、次回大会までの間の1971年12月2日に召された。それはちょうどリチャード・L・エバンズ長老の死後1カ月であり、エバンズ長

マービン は 経営管理の学位を得るのに苦学して大学を出た。

老の死による空席をアシュトン長老が満たしたのである。

アシュトン長老の名前は、まず最初に、全教会を通じ各地のステーキ部大会で教会員の賛成と支持のために提出され、次いで、この4月総大会で会員の前に提示された。

アシュトン長老の任命が発表される と直ちに、ある記者はアシュトン長老に、この召しでアシュトン長老が動揺したかどうか尋ねた。アシュトン長老は、「いや、召しを受けても動揺を覚えなかった。確かに驚きはしたが、動揺はしなかった。教会で自分の義務を果たそうと努めている人は、だれであっても召しがくる時に決して動揺はしない」と答えた。またアシュトン長老を良く知っている人にとっても、この召しは決して動揺も与えなければ驚きもしなかった。この聖なる使徒職に任命されたことは、今までアシュトン長老が築いてきた奉仕と献身の鎖に単に もう1つの環をつなぐことにすぎない。事実、アシュトン長老の生涯と、その先祖の生涯をみると、主がいかに指導者としてこのしもべを備えられたかがわかる。

アシュトン長老の先祖は、遠い地で回復された福音の真理を受け入れた教会初期の改宗者の1人である。アシュトン長老の曾祖父エドワード・アシュトン は、1821年英国のノースウェールズで生まれ、28歳の時、1849年7月、

宣教師から熱心に福音を聞いてそれを受け入れ、バプテスマを受けた。そして翌年アメリカに向けて出帆した。エドワード・アシュトン は、親戚や故国を捨て去って、聖徒らに自分の運命を投じたのである。それ以来アシュトンの名は教会内で著名となり尊敬を受け てきた。

アシュトン長老の父親マービン・O・アシュトン は、英国で伝道し、監督、ステーキ部高等評議員、ステーキ部長会の一員、ステーキ部長をつとめ、1938年から、1946年にこの世を去るまで教会の管理監督会の一員であった。

アシュトン長老の母方の曾祖父であるトーマス・E・ジェレミーは、教会の初期の頃に改宗し、1849年にアメリカに渡った最初のウェールズの聖徒の1人であった。その息子ジョン・ジェレミーは歴史の好きな聡明な人で、妻をなくしたあと3人の小さな娘を1人で育てあげた。その3人の娘の1人がアシュトン長老の母親である。

☞ マービン・J・アシュトン長老は、1969年10月から、教会幹部である十二使徒補助をつとめてきたが、当時アシュトン長老は、教会の新しい統合社会事業計画運営委員長として召されたのである。この職務にあってアシュトン長老は、社会的特権に恵まれず、不遇で、しいたげられている、社会的地位の低い人々と共に働き、無数の人々から慕われた。アシュトン長老はまた21

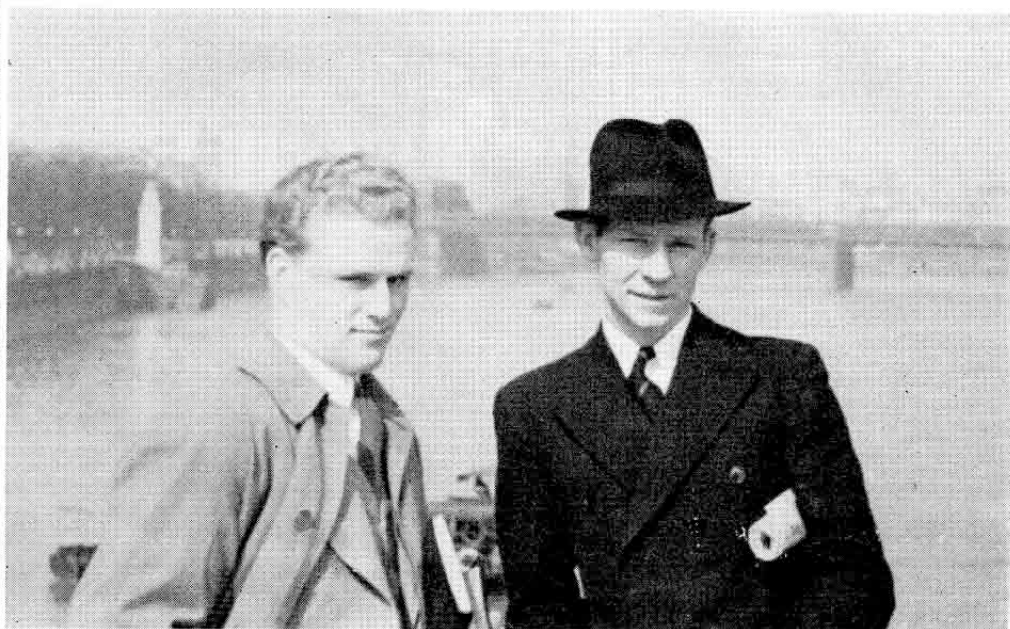


15歳の若きマーブ。この写真は、自分で個人的に健康について書いた記事と一緒にデゼルトニュースに発表されたもの。

右から2人目にすわっているのがアシュトン長老で、全英選手権を取った宣教師チームのキャプテンであった。洋服を着ているのはヒュー・・B・ブラウン長老である。



アシュトン長老が英国で伝道するのに家を去ったのは21歳の時であった。これは、ロンドンのテムズ川のほとりで、同僚のアルドン・J・アンダーソンと一緒に撮影したもの。アンダーソン長老は現在ソルトレーク市で連邦判事をしている。



1962年頃のマービン・O. とレイ・J・アシュトンの子供たちの写真。左から右へ、アフトン・カーティス、アシュトン姉妹、ウエンデル・J・アシュトン、マービン・J・アシュトン、フィリス・ガーディナー、そしてエレノア・バッチャー。もう一人のテッドは、17歳の時自動車事故でなくなった。



年間デゼレト出版社の社長や、デゼレト体育館の役員として教会に尽くした。十二使徒補助に任命される前は、8年間YMMIA中央管理会長会の第一副会長として、また3年間は同じ第二副会長として、21年間は同じ中央管理会員として働いた。

この任にあってアシュトン長老は、世界中を旅し、教会のステーク部や伝道部の若人らにプログラムを携えて歩いた。このたびの新しい召しは、長年アシュトン長老が従事してきた仕事を進展させるものとなる。

㊦ どのような特別な才能、資質をもって、アシュトン長老は新しい役職につかれるのだろうか。アシュトン長老を良く知っている人々は、彼がいつも主に對し信仰をもち、教会に献身的で、周囲の人々に心からの愛をいきている人だと語っている。アシュトン長老は親切で、物柔らかに話し、よく人の話を聞き、紳士で、平和の作り手である。アシュトン長老は助けを必要としている人や問題のある人に強い関心を持ち非常に同情を覚える人である。まただれでも安心を覚えるような微笑をたたえ、ユーモアに対するセンスが鋭く、いかにも上品で洗練された感じの人で、それでいて統率力のある人である。アシュトン長老が部屋を歩くと、そこにいあわす人たちが注目する程である。

恵まれて、筆者は他の人と共にアシ

1940年にマービン・J・アシュトンとノーマ・バートソンは結婚したが、これは、教会と学校でのすぐれた若い2人の指導者の結びつきであった。結婚後1週間、2人は、マービンが花嫁のために建てた新居へと移った。



シュトン長老とはほぼ同時期に（1949年）MIA中央管理会に任命され、数年間にわたって成熟してゆくアシュトン長老を見守った。アシュトン長老が集会を司会し、報告をし、話をし、問題を分析し、多くの責任を果たすのを目にする時、苦境にあっても冷静で、勧告や忠告を与える前によくそれを吟味し

2つの意見を和解させるそのすばらしい能力、そして信頼される力にいつも感嘆した。教会の若人と親密になるそのすばらしさ、若者を理解する特異な能力、若者が反応を示すような言葉の選定や話の仕方の才能などに注目してきた。アシュトン長老はだれでもその勧告を求めてくるようなたぐいの人である。アシュトン長老が指導者に忠実で、絶えず教会幹部を支持していることに感銘を覚える。

しかし、以上のすべてのことと同時に、アシュトン長老は率直で勇気ある人として知られている。彼は人生というゲームにあってと同様、体育のゲームでも真剣な人である。アシュトン長老は人にぬきでるためにすばらしい意志力に恵まれ、熟練した経営者、財産運用家として尊敬されている。寛大で、慎重で、きちょうめんな人という評判がある。30年以上もアシュトン長老と一緒にテニスをしている人たちは、テニスの時間の約束であっても、決して遅れたことがなかったと語っている。また友人は、アシュトン長老が決して時間を浪費せず、いつも自分をよく準備している人であると言っている。仕事をする時間は、仕事に打ち込み、遊んで楽しむ時は、だれよりもよく遊び楽しんでいる。

Q マービン・ジェレミー・アシュトンと名づけられるはずの男の子が、1915年5月6日、ソルトレーク市ブローニ

ング通り1341番地の黄色い練瓦作りの2階建ての家で、マービン・O.とレイ・ジェレミー・アシュトンとの間に生まれた。当時、家は市の郊外にあり、幼かったマービンは寝室で、ソルトレーク盆地の小丘におおかみのなくのをしばしば耳にした。

マービンの両親は、早くからよく働くことの価値と、お金の尊さを彼に教えた。少年時代マーブ（マービンの愛称）は、兎や鳩を飼い、家族が経営している約2,400坪の農場で働き、果物や野菜を育ててそれを売った。後に高校へ通学している間、マーブはシュガーハウスで父がやっている金物店を手伝った。マーブはユタ大学へ在学中半日は店で働き、半日学校へ行って自分の道をやりとおした。ユタ大学経営学部を優等で卒業した上、2年間学内新聞のスポーツ欄主任を務めたほか、多くの課外活動に参加する時間を持ちあわせていた。

マービン・Oとレイ・アシュトンは子供たちに「いつも自分はだれなのかを考え」、「いつも自分の思ったとおりにし、自分の2本の足で立つように」と教え育てた。アシュトン家の子供らは知恵の言葉のようなことに関して取り立てて教えられた記憶がない。家庭では、教会のあらゆる活動への参加や、あらゆる戒めを守ることは当然のことと思われた。父親がワード部やステーク部で働き、教会の管理監督会の一員

であった間も、母親は初等協会を教え扶助協会の教師であった。子供らの心は、教会で活発であること以外には何の考えもなかった。日曜日は聖日として守り、集会に出席し、MIAに参加し、什分の一を納めることなどはすべて慣例となっていた。マーブと、現在十二使徒地区代表をしているマーブの兄弟は神権活動やスカウト、Mメンバープログラムを通じて進歩し、いつも同輩の指導者であった。

Q スポーツではマーブはいつもひいでていた。伝道していた時も、バスケットボールチームのキャプテンで全英タイトルの賞を得、またチームの一員として、ヨーロッパ選手権の賞を得ている。チームは1日の伝道が終わってから、週に2晩の練習をした。興味ある裏話としては、皆はユニフォームを買う余裕がなかったので、チームのメンバーは、伝道の休みの日に、布地を切ったり、寸法を合わせたりして自分でユニフォームを縫ったということである。

Q アシュトン長老は肉体的な健康を保つのに、テニスや、足ぶみ運動その他の運動のスケジュールを厳密に守った。教会幹部になってからもなお、土曜の朝7時、ステーク部大会へ出かける前や、週に1度昼にはテニスをするように心掛けている。また週に2度朝の7時に、デゼレト体育館でパドルボール¹をするようにしている。アシュト

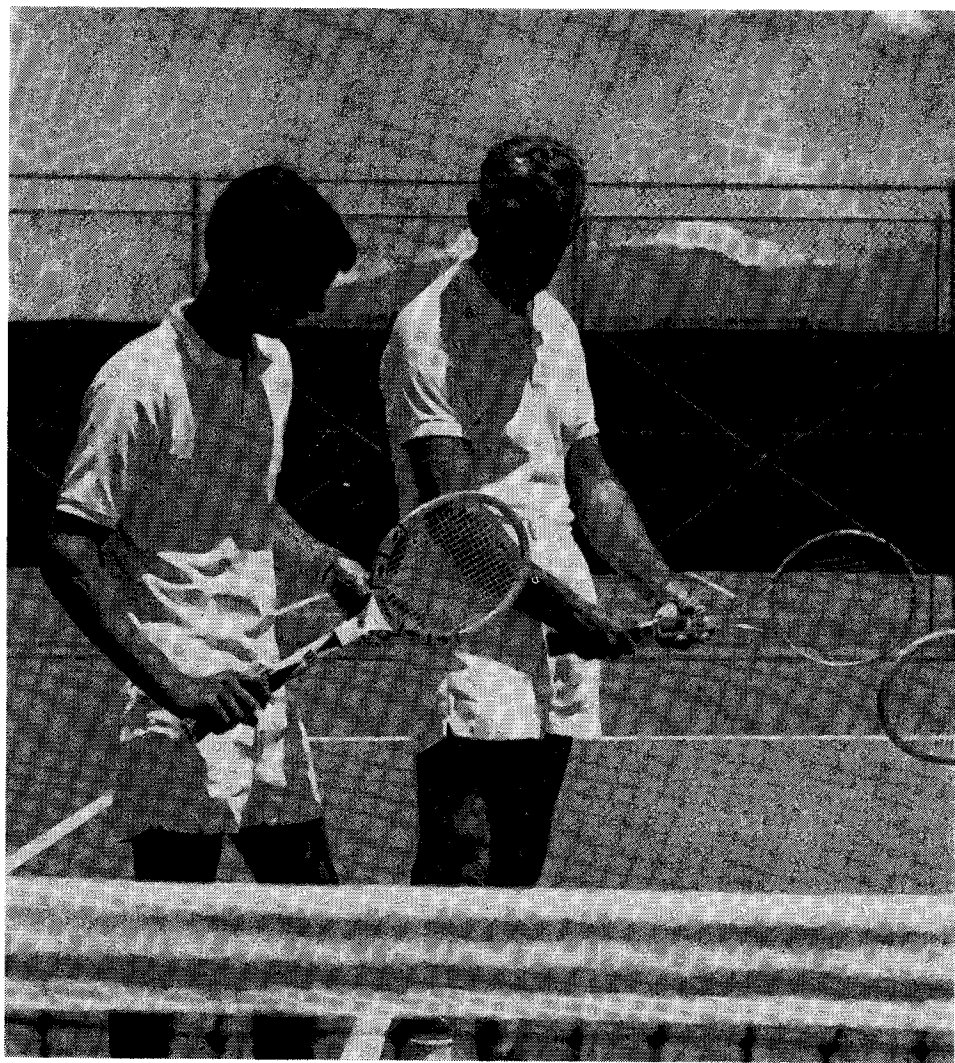
ン長老の、テニスのよきパートナーでもありまた好敵の1人は愛する妻のノーマである。

アシュトン長老は、英国では傑出した宣教師だった。伝道の最初の頃、戸別訪問の基本的なテクニックの1つは「ミレニアルスター」の予約をとることであった。アシュトン長老は、他の宣教師が1年がかりでやる以上の予約を5カ月で取った。ジョセフ・J・キャノン伝道部長は1937年7月7日彼に次のように書き送った。「この2週間あなたは、1日に3件の割合で『ミレニアルスター』の予約を取っており、心から賞賛とお祝いを述べたい。『ミレニアルスター』の予約をとるのに魔法の言葉はない。それは、勤勉さと、熱心さと、人柄と信仰の賜物によるのである。」

アシュトン長老はジャーナリストとしての訓練を受け、その才能があったので、後に「ミレニアルスター」の準編集者に指名され、また、英国伝道本部事務所で監督長老として働いた。ロンドンのメソジスト派の有名な牧師と親しくしたので、メソジスト少年団プログラムを6カ月以上にわたって指導するように招請されたりもした。

アシュトン長老が伝道する前および伝道開始後半年の間伝道部長であった、ヒュー・B・ブラウン長老は、「彼は常にどこでも何にでもこたえる」長老であると言ってたえ、次のよう

アシュトン長老の生活で、スポーツは大事な役割を果たしている。これは、彼が、2人の友人に、テニスの大事なポイントを教えているところ。



に書いた。「この伝道部で私が心から注目した若い宣教師はあなたをおいてなく、あなた以上に影響力を与え協力を示したものは外にいなかった。」

若きマーブ・アシュトンは少女に非常な人気があったが、高校卒業の夜ま

で正式なデートはしたことがなかった。相手の名はノーマ・バートソンであった。バートソン家は、勤勉なノルウェー系の家族で、アシュトン家と同じワード部内であり、1町位離れた所に住んでいた。ジョン・バート

外の活動にも参加していたからである。2人の間のロマンスは大学を通じて深まり、1940年ソルトレーク神殿で結婚した。

それは二人の若い傑出した教会と地域の指導者の結びつきであった。ノーマ・アシュトンとは絶えず教会に活発であった。彼女はまた、ユタ大学で、自分の女子学生クラブの役員である。女子学生連盟の会長をしながら、優等で卒業し、課外活動も優秀であった。ノーマは教育専攻で学位をとり、マーブが伝道に出る前は学校で教えていた。2人は、マーブが伝道から帰ってから1年とちょっと交際を続けたあとで結婚した。マーブが1度ならず、「ノーマは、私にとって最上の人だ」というのを聞いたものである。

結婚前、マーブはあいてる時間のほとんどを家作りに使った。というのは彼はいつも花嫁を迎え入れられる家を作りたいと願っていたからである。抵当をなくし、収入を補うのに、一時に5ないし6戸、ほかの家を建ててそれ売り払った。「私はいつも家を抵当に入れておくのは気持ちがよくないので、できるだけ早く支払ってしまいたい」と語った。

アシュトン兄弟姉妹は4人の子供に恵まれている。ジョンは弁護士で英国南伝道部で伝道し、スティーブンはニュージーランド南部伝道部から帰還し、大学で社会事業を研究している。娘の

デール（ジョン）ウィードンはユタ大学の卒業生で現在アイダホ州のボイスに住んでおり、ジャニスはブリガム・ヤング大学に在学中である。1人の孫もいる。

アシュトン長老夫妻の結婚は理想的なもので、イエス・キリストの福音の光に照らされた幸福な家庭生活を送っている。愛と働きで満たされた家庭でマーブとノーマの2人はいつも教会の仕事で忙しいとは言え、お互いにおろそかにしたり、子供を見過ごすようなことは決してなかった。1968年以降ノーマは扶助協会中央管理会の一員であったが、それに先立つ数年間、マーブがMIAの中央管理会員の時は、彼女はワード部やステーク部のYWMA会長を勤めた。ノーマは教会内で役職につかない時期は1度もなかった。

マーブにとっては21年間毎週水曜の夜は中央管理会の集会があったが、残った家族は時折デゼレト体育館で水泳を楽しんだ。そして帰り道、時々父親を待ちうけてはもてなしをした。「そういうわけで、私が家族中で一番泳がないのはちっとも不思議ではないんだ」とアシュトンはしゃれこんでいる。

アシュトン家はワード部や近所の若者のたまり場になっている。アシュトン家の人々は若い人も年老いた人をも心から認めて愛情をいだいている。アシュトン家の人たちは皆、素晴らしい主人役として知られており、やってくる

ソンは建設会社をやっていて、家の裏庭にはテニスコートがあった。ノーマとマーブがお互いに最初にひかれたのは、テニスによってだったかもしれない。というのは、最初のデートの前に二人でよくテニスをしたり、ワードの

人たちのために有益なもてなしを準備するのでどこでも評判がよい。

アシュトン長老は以上のほかに、市民活動にも参加した。今までスカウトプログラムに興味をもち、息子と共にイーグルのランクを持っている。アシュトン長老はスカウトプログラムに貢献したことでシルバービーバーとシルバーアンティロープ賞を受けており、国の委員、地区幹部委員、グレートソルトレーク評議会の幹部委員として奉仕した。1960年、ユタ州のホワイトハウス青少年大会委員に任命されている。1959年から1963年まではユタ州議員として有能さを賞賛され、顕著な仕事を果たした。

人の価は、その人が交わる人々の生活に与える影響によって決定される。ここに、アシュトン長老と親しく交際している人の言葉がある。

「長年の仲間として、彼が背丈でも霊の上でも高い人であることがわかった。強固ではあっても頑固ではなく、仕事や責任を恐れず、自信を与えてくれる人である。良きチームプレーヤーで、温和な、いつも微笑をたたえていて友好的で、一緒にいると楽しくなり近づきやすく、人の言うことに耳を傾け、若々しくて若者から愛され、スポーツの良き友で、実際にやっている時とただ見ている時にかかわらずフェアプレーを強く叫ぶ、良きスポーツマンシップの持ち主であり、物事を良くな



アシュトン長老は21年間、YMMIAの中央管理会と中央管理会会長会で働いた。これは、デビッド・O・マッケイ大管長(当時)、ジョセフ・フィールディング・スミス十二使徒定員会会長、N・エルドン・タナー副管長、YMMIA中央管理会会長G・カルロス・スミス兄弟(中央)、そしてカール・H・ビューナー、また、YWMIA中央管理会会長会のフローレンス・S・ジャコブセン、マーガレット・R・ジャクソン、そしてドロシー・P・ホルト姉妹らと一緒に撮ったものである。

す人であることがわかった。」

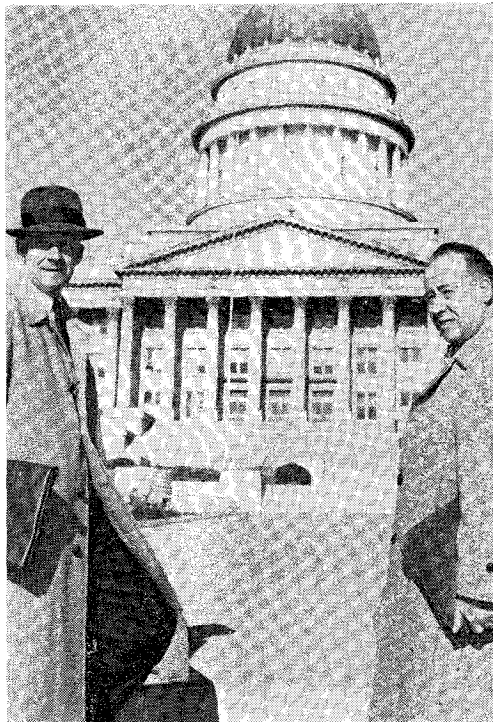
以上のようなことが、この神権時代に、イエス・キリストの教会の79番目の十二使徒評議員として召されたマービン・J・アシュトンの横顔である。

アシュトン長老の事務所の壁には、彼の生涯を象徴するようなインディアンの格言が掲げられている。「よく聞け、さもないとお前の舌はお前をつんばにしよう。」 1971年4月20日、



アシュトン長老は常に市民活動にも関心をもったが、これは、代表者大会で(議会のための)候補者を推せんしているところ。

1959年から1963年にわたって、アシュトン長老はユタ州議会議員を務めたが、共和党、民主党双方から賞賛を博した。これは1961年、現ユタ州担当国務長官であるクライド・ミラー議員と撮影したものである。



1969年10月以降、アシュトン長老は教会の社会事業プログラムの運営委員長であった。これは、かわいいインディアン少女ポーリン・マーチンを囲んで、十二使徒評議員のスベンサー・W・キンボール会長代理やリグランド・リチャーズ長老らと写したものである。



アシュトン長老は、ブリガム・ヤング大学での祈禱の時間に、「彼は何も答えなかった」と題する話をした。この素晴らしい話の主旨は、時折、最も効果的な説教や、最も説得力のある話や、最も甘い調子、また最も鋭敏な反応は完全な沈黙の中に表わされるものであるということであった。アシュトン長老は、「今は、筋肉の音色、頭脳の音色、そして霊的な音色が、沈黙のうち

にそれぞれが最も効果的に話ができる時期である」と語った。

主のみ業のため教会中を旅する時、聖徒はアシュトン長老が沈黙の説教者であり、高い道德心、知的肉体的音色を放たれるのを敬愛している。アシュトン長老は、神と同胞を愛し、なによりもまず教会の義務を果たし、他の人の話をよく聞き、語ることを少なくして多くを言い、どこででも、神の子供を

慰め、勧告するのに好んで次のように言っている。「自分の現在の状態から出発しなさい」と。またとまどっている家族には、「お互にあきらめてしまおうと家庭で失敗がはじまるばかりである」と忠告している。アシュトン長老はイエス・キリストの特別な証人としてふさわしく思われてきたのである。

- 1 ハンドボールのボールを使って木製のラケットで打ちあって試合をする。

「社会の中で神聖さを汚すことがきわめて一般的になり、次代を担う者がそのはなはだしい圧力のもとで、光の道と暗黒の道を正しく選ぶことのできない時がやってくる」とはまさに至言である。(ヒュー・ニブレイ「モルモン経研究」)

我々は邪悪な世界に住んでいる。我々の記憶の中で、これほどまでに悪の力が激しく隊形を組んで勢ぞろいしたことはない。悪魔は巧みに組織作りをしている。今日ほどに、悪魔が自分のために多くの使者を持ったことはない。その彼の多くの代理人により、悪魔は自分の主権を宣言して、えり抜きの若者たちを滅ぼそうと試みている。

悪魔の運勢による卑劣なしわざが数を増している証拠は枚挙のいとまがない。どこを見ても胸の裂りさけるような悲しい結果を目にする。悪魔にそそのかされた破壊的な力が、文学、芸術、映画、テレビ、ラジオ、服装、ダンスそして最近のいわゆるポピュラーミュージックをねらっている。サタンは、家庭、家族、特に若い人々を弱め破壊しようと多くの手だてを用いている。今日は、以前になかったほどに、若者に向けられているように思われる。数多くの手紙の中に、ポピュラーミュージックの悪影響について関心を持っているある父親の手紙がある。この父親

は、若者に対して豊富な知識を持つ教師でもある。

「音楽は雰囲気を作り出す。雰囲気は環境を作り出す。環境は行為に影響を及ぼす。ではこの過程はどのようなものだろうか。

リズムは、音楽の中で最も肉体的な要素の強いものである。音楽で、音色の効果なしに肉体を動かせる唯一の要素である。麻薬やアルコールで鈍くなった精神でも、なお打ちたたく音には反応できる。

音量が大きいと精神が一層錯乱状態になる。苦しくなるまで音量を大きくすると肉体的に不快を覚え、高度な思考や推理の妨げとなる。(またこの破壊的な音楽の音量を下げて、別の悪い面が取り除かれるわけではない)

極端な繰り返しは、原始的言葉であるロックのもう1つの計略である。

ロックのリズムと双子とも言える回転(体の動かし方)は、清潔な手と清い心をもつ者なら明確に識別できる性

若者に向 サタン

十二使徒評
エズラ・タフ



質のものである。

暗やみ（またかすかな明り）は、ロックに見られるもう1つの面である。それは、匿名という仮面で良心を弱めてしまう暗黒の集団である。暗やみで身元が不明になり、責任に対する正常な感覚が麻痺してしまう。

暗やみの中で目もくらむように次々と点滅するストロボライトは、尋問者が脅迫のために使う一番強烈な光や人の行動を支配する催眠術者の振子のように、抵抗する力を弱めてしまう…

この父親は続けて語っている。「サイケデリック調のものはどれも、麻薬セックス、反抗、不信心へと人を容易にいざなう。叙情詩のようなものに、わいせつ感を抱かせる金切声の歌詞をかみあわせたこの人を恍惚とさせる音楽は卑わいな実を結んできた。ロック愛好者のリーダーは簡単に墮落している……。

またこの醜惡な音楽の最も欺まんのところは、悪は絶対的ではないと否

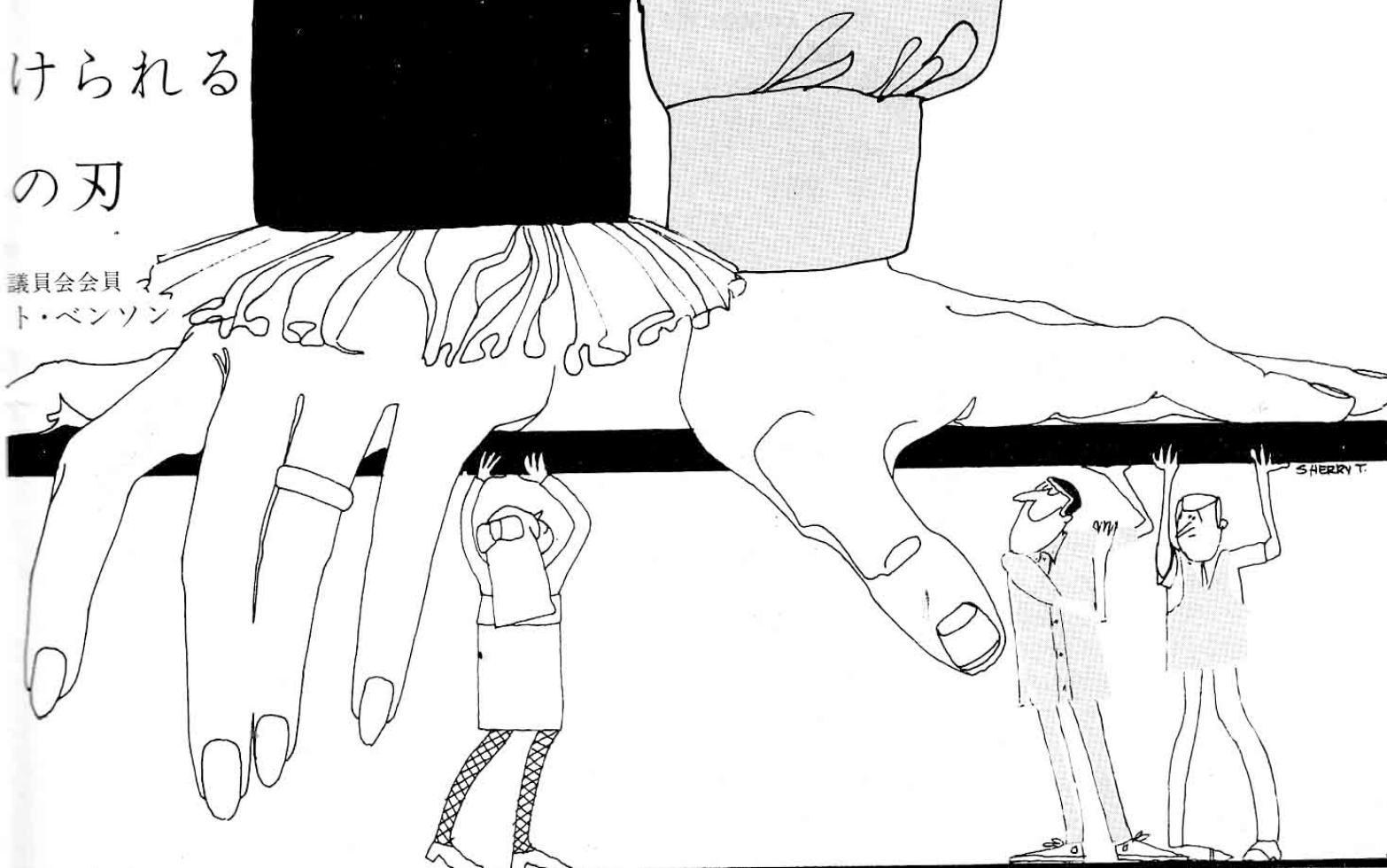
定する点にある。しかし我々の宗教には絶対的なものがあって、『自由主義的なモルモン』と称する人々が唱道するような哲学を我々は合理化することはできないし、安心して正当化することはできない。

もし、教会の指導者がロックミュージックを認めないなら、多くの若者を失ってしまうかもしれないなどということは、何と誤った考えではなからうか。（MIA音楽委員会）現在でさえ、サタンの歌や、麻薬、セックス、暴動、そして背教へと若者を失っているのである。モルモン野外劇から次の言葉を思い起こすことができる。『モロナイはあなたがたが悪と妥協できないことを知っていたのである。もし妥協するとすれば、いつも悪魔が勝利をおさめるようになる。』（リチャード・ニブレイの手紙より引用）

若者の教師で大学の音楽部に関係しているある父親からのこの手紙は、分析的ではあるが、多くの両親や若者の

けられる
の刃

議員会会員
ト・ベンソン



指導者の関心を表わしている。

教会は大衆の要求に歩み寄ってはいらない。タバコをすい、コーヒー、アルコール類を飲む人は、今日のミニスカートと同様、教会の確固とした標準と確かに相いれないものとして遠ざけられている。

今日教会はいまだかつてないようなすばらしい若者を擁している。この若者たちは、えり抜きの霊であって、この最も問題の多い重大な時期に地上に送られてきた。地上に神の王国を打ち建てるという偉大な責任を課せられたこの若者たちは、厳しい問題をかかえている。

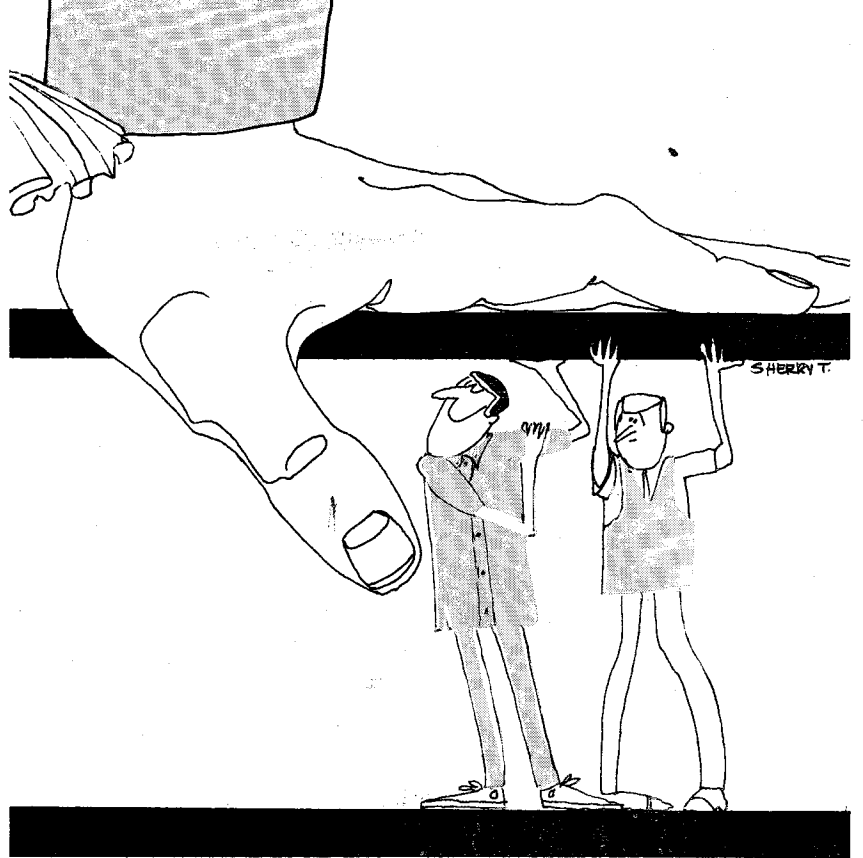
この偉大で重要な責任や課題が、最も困難な時代に直面している。悪の力がこれほどまでに狡猾で誘惑的だったことはない。あらゆる見事なもの、良きもの、我々を高めてくれるものが、いたるところで軽んぜられ、弱められ落ち目になっているように思われる。そして両親が気持よく自己満足にひたって、誤った安心感へとなだめられている間に、あらゆる悪しきものが若者をねらっているのである。

シオンにあって「万事よろしい」とは言えない。モルモン経の中で靈感を受けた予言者はまた塔の上の見張り番として今日を予見し、警告を発している。

「ごらん、その時に悪魔はある人々の心に入って荒々しい行ないをさせ、またこの人たちに善いことを怒らせる。

またほかの人々をなだめ、この人たちをすかして肉欲をほしいまにさせるから、その人々は『シオンの中では万事よろしい。シオンは栄えて実に何事もみなよろしい』と言う。このように悪魔はこの人々をだまし、心を配って地獄へつれてゆくのである。

悪魔はまたほかの或る人々にへつらってこの人々を迷わせ、地獄はないものであると言い、また悪魔はないものであるから私は悪魔ではないと言い、このように耳にささやいて一度かかったら決して逃れられない恐ろしい鎖でとうとう縛ってしまう。」



「それであるからシオンでのんきに暮らす者は禍である。

何事もみなよろしいと言う者は禍である。

実に人の誠命に聞き従い、神の権能と聖霊の賜とをしりぞける者は禍である。」(Ⅱ ニーフアイ28:20-22, 24-26)

主は近代の予言者を通して我々に神聖な義務を与えておられる。

「誠にわれ汝らすべてに告ぐ、汝ら起ちて己が光を輝かせ。これ汝らの光よるずの国民のはたじるしとならんため」(教義と聖約115章5節)

「すなわちシオンはその美と聖とを増し、その境域は拡がりそのステーキ部は堅うせられざるべからず。われ誠に汝らに告ぐ、シオンは起ちてその美しき衣を着けざるべからずと。」(教義と聖約82:14)

「この故に、汝の心をはり上げて喜べ。汝の腰を引きからげ、わが物の具をことごとく身に甲うべし、汝悪しき日に遭いて立ちむかい、すべてのこと成就し立ち得んためなり。」(教義と聖約27:15)

我々は教会の若者を愛しており、また主も若者を愛しておられるのを知っ

ている。教会は、この若者を助け救うための権利をいかにしてでも全うしたい。若者は我々の未来であり、我々は彼等を信頼している。我々は、若者が幸せであってほしいと願っている。各自が選んだ分野で成功してほしいと願っている。日の栄光の王国で昇栄するよう願っている。

若者に言おう。あなたたちは永遠の存在者なのだ。生命は永遠であると。悪事をなして正義を思うことはできない。立派で有益な、喜びにあふれた生涯を送るには、それだけのものを支払わなければならないのだ。そのように生きるなら、深い後悔もなく、心の痛む思いもしないであろう。そのように生きるなら、それなくしてはだれであっても最善が尽くせない見えざる力に手が届き、戸をたたいて求めることができるであろう。

物事にはすべて表裏が必要である。選択の自由は神が与えたもうた永遠の原則である。主に従って、サタンのわなや狡猾な計略から逃れるのが、我々の務めである。それは容易なことではない。

この人生を実験室にして、顕微鏡で見るとように他人の生涯を観察し研究す

ることができる。神につく人が幸せな人であるのに注目せよ。「したいようにせよ」と叫び、罪深く快樂にふける享楽主義者は決して幸せではない。彼の虚偽の歡樂の仮面の下には、永劫の死という避けられない悲劇がひそんでいる。黒い影につきまとわれながら、彼は有益で幸せな生涯を、麻薬、アルコール、セックス、そしてロックミュージックへと、一時的な暗い忘却を求めて売り渡してしまっている。

サタンの手口を学ぶと、サタンが我々をそそのかす方法に気づく。サタンは狡猾でどこにどのように打撃を与えるかをよく知っている。サタンの攻撃を最も受けやすい者は若者である。青春は人生の春であり、あらゆるものが新しく映る時である。青春は冒険と覚醒の精神で満ちている。健康ではつらつとした肉体が形成され、時には節制に対する警告を冷笑する時期でもある。青春ははてしなく、しばしば年齢という地平線をはるかかなたにしか感じられない時である。このように「今を楽しむ」人々は、現在が間もなく過去になり、その生涯を無為に過ごしたか、豊かに過ごしたかをふり返る時が来るのを忘れてしまっている。若者には、「お代は見てからのお帰し」というサタンの計略を制御できない要素がある。まことに悪魔は多くの手口を用いる。

サタンにとって、混乱状態は効果的な環境になる。今日多くの混乱がある。サタンは混乱を作り出すのに種々の手くだを使っている。その1つは定義をこじつけるやり方である。麻薬の体験を記述するのに、「現実からの逃避」とより正確に記述するより、むしろ「心の広がり」といった言葉を使う。

「偉大な伝統をもつ自由という言葉も好んで混乱をひきおこすのに用いられている。暴動、爆撃、放火、そして殺人が自由の名のもとに行なわれている。わいせつなものが言論の自由を試みている。ポルノや麻薬、不道德が、ミニスカートやヌードと共に個人の自由の表現であると主張されている。放

縦と無政府主義はこれらの誤った自由の所産である。

定義の混乱はポルノにも言える。子供はポルノを見きわめることができるのに、今日偉大な法律家とされている人々はそれが何であるか定義づけないでいる。

寛容はサタンの働きにとって値うちのある言葉である。200年前、アレクサンダー・ポープ¹は次のように戒めている。

「悪徳は恐ろしきなりをした怪物なり。

憎まれるはずなのに、その顔をしげく見つめると、

初めはがまんし、次に哀れになり、そして抱きしめてしまうのだ。」

(人間小論より)

「あざけりと混乱は一つになって働きかける。探求する若者を混乱させるのに、皮肉屋は混同した隠喩を使ってその若者の批難をあざけり、自分の身を守るのである。

このような皮肉は、容易に人を笑わせ、シオンにあって万事よろしいと安心させるかもしれないが、それは悪魔の惑わしなのである。

「相対主義の哲学は真理の永遠の原則を攻撃する。相対主義者は『もしポピュラーソングに卑わいなものを連想するなら、それはその人がみだらな心を持っているからだ』と主張する。

この哲学の論理は連想(暗示)の言葉を誤っている。真の叙情詩には、少しも卑わいなものの暗示はないものである。

「ロック(ミュージック)が悪魔の狡猾な手段であることにもし疑いがあるなら、その実で判断すればよい。ロックに陶醉している者たちの墮落ぶりが広く宣伝されているだけでもその悪影響を批難するに十分である。ロックはついに、最近、マンモスロック音楽祭をやるまでになった。この不健全な祭は何百にもほり、多くの若者を悪に染まらせている。今日、ロック祭で麻薬やセックスや、暴動の祭になっていないものがあるだろうか。」(リチャード・ニブレイ)

主のみたまは、人を啓発しキリストに導く者を祝福されるのである。LSD、マリアァナの使用や、スピード狂いでしかなおせないような人類の退歩ともいうべきこの腐乱した祭の前に、主のみたまは祝福を与えられるであろうか。見るに恥ずかしいヌードや乱行が下品に人前にさらされる時に、主のみたまはそれを喜ばれるだろうか。ロック祭で使われる言葉は往々にしてみだらなものである。原始的な偶像崇拜で使われる騒音で感覚を押しつぶしてしまうようなロックの音楽は、霊の根底に対し肉体を賛美するものである。長い人類の歴史にあって、若者のロック祭はサタンが大きな成功を収めたものの1つである。古代ギリシャ、ローマの伝説である、酒神バカスの祭でさえ、この麻薬、不品行、暴動、好色の音楽といった汚水だめに見られる途方もないわいせつさとは比べものにならない。かの有名なウッドストックの祭は、病める国の巨大な現象であったが前例がないほど卑わいな映画やロックのレコードが、この我々の山の家で盛大に商売をしているのである。

主は言われた。「すべて心の歌は、われの悦びなり。然り、義しき者の歌はわれに対する祈りなり……。」(教義と聖約25:12)

主が喜ばれることについて、モルモン経典、ニーファイ第三書に次のようにしるしてある。「……一同歌い出して神を讃美した……」(Ⅲ ニーファイ 4:31)

サタンが喜ぶことについては、ニーファイ第一書の中に「リーハイの子供らとイシメルの息子たちおよびその妻たちはみな心が浮れ、おどりをおどり歌を唱い無礼な話を始めた……」(Ⅰ ニーファイ 18:9 参照)とある。

さて、音楽専門家は次のように指摘している。「ロックと麻薬の文化は新しい方向に向かっており、それを多くの牧師や音楽産業界の者が、金色の雲の裏側に輝く銀色として声をあげて迎え入れている。宗教ロックはポピュラー音楽で「トップ・テン(上位10番内)」に入っている。ロックと麻薬が

かもし出す状況への抵抗のもりあがり
は、健全のように見せかけるこの新し
い道徳によってそうされてしまってい
る。しかし、宗教ロックをよく調べる
なら、悪賢く変装した反キリストが仮
面の下から顔を出すのである。啓示に
よる宗教を神話に変えることで、ロッ
クは罪の実在を拒みながら正義のマ
ントであるかのようによそおうのであ
る。罪を認めずして、新しい道徳は、
見せかけの聖衣のかげにその不信心ぶ
りを続けてゆくのである。売れ行きの
早いアルバムは、イエス・キリストと
裏切りのユダの役割をさかさまにし
ているが、それはイザヤの警告によくあ
てはまっている。「わざわざいなるかな、
彼らは悪を呼んで善といい、善を呼ん
で悪といい、暗きを光とし光を暗しと
する」(イザヤ5:20)

(リチャード・ニブレイ)

教会の指導者が、このような不敬な
やからや背教者に向かって、その罪惡
を語ろうと強く感じ、また1971年8月
号の神権会報で特別に項目を設け、教
会員に注意を喚起したのは、何んら不
思議なことではない。

確かに我々は、イエス・キリストの
回復された福音が全世界に希望をもた
らす最良の時代に住んでいる。それで
いてまた、サタンが猛威をふるう最惡
の時代でもある。サタンは、無慈悲な
ほど精力的に刈り入れに突き進んでい
る。

このサタンの計略をどのようにして
妨げられるだろうか。昨年度のMIA
のテーマ聖句は、従うべき良い手本を
示してくれている。教会の信仰箇条第
13条は大切な鍵を秘めている。「……
もし何にても、徳高きこと好ましきこ
と、よき聞えあること、あるいは褒む
べきことあらば、われらはこれらをた
ずねもとむるなり。」

しかし我々は本当に求めているだろ
うか。求めることは努力を必要とす
る。

レコードの収納箱は、色彩豊かな、
時には無彩色のジャケットと一緒にな
って若者を手招きし、おろかな商業主
義の大きな積荷の下で、徳高き、好ま

しき多くの大作を葬り去っている。

テレビやラジオは、大衆の凡庸さに
近づくことで、人をひきつけようと
している。テレビやラジオが生み出すほ
とんどの番組は好ましいとは言いがた
くなくてきている。このテレビやラジ
オの発明者は主のみたまに導かれてい
た。がしかし、ひとたびテレビやラジ
オが世間に良い作品を紹介すると、暗
黒の力は、我々を破壊するのにテレビ
・ラジオをもてあそばし始めた。蓄音機、映画、ラジオ、そしてテレビ
と、各媒体に、それぞれの発明者の意
図を転じて下落させようとした跡が容
易にうかがえる。

音楽が行動に与える影響を長年研究
してきた音楽家の言葉から引用したい
と思う。

「サタンは、音楽に、野蛮なけもの
をなだめたり、かりたてたりする魔力
があるのを知っているのである。音楽
に雰囲気を作り出す力のあることは、
ハリウッドが始められる前から知られ
ていたことである。雰囲気は環境を作
り出す。環境は行為に影響を及ぼす—
バビロンやエノクの町の人々の行為の
ように。」

サイケデリック調のものが響いてく
るラジオやレコードを聞いて吐き気を
催す両親は、不平を言う前に、自分自
身の集めたレコードのリストを調べる
方が良い。その不平の種になるもの
が、たとえ小さなものであったり、一
見何の変哲もなかったり、使われてい
ないとしても、その不平の種は、両親
に向けられる。幼児のものまねという
肥沃な土壌に文化の種は最も良くまか
れる。十代になってからどんなに批判
しても、幼年時代に模範を示さなかつ
た失敗を償うことはできない。自分が
英雄視される機会を失った両親は、十
代の英雄との間に断絶を残してしま
う。」(リチャード・ニブレイ)

今日魔力に魅せられているこの英雄
の大半は、もはや品位もなければ、や
る気もなく、謙遜さもなければ、正義
も感じないでいる。書籍や雑誌、新聞
—特に若者の欄—を見ると、若者はみ
だらで、卑わいで、不品行で、貧欲

で、ある場合には残酷でさえあるのを知
る。若者が称賛する仲間が若者の前
に繰り広げるような生活は、今日ここ
にいる我々が実に避けねばならないも
のである。この醜い生活の模範から若
者の感嘆をそらすには、小さい時から
始めなければならない。子供の世話や
養育にあたっては、肉体的、精神的、
知的生活と同様に情緒的生活について
も関心を払わなければならない。

今日程、若者にとって、この世にあ
ってこの世の者でないことが非常に困
難な時はない。しかしその重荷を両親
は共に分け合わなければならない。家
庭の夕べはサタンの攻撃に対して、重
要なとりでとなる。MIAのプログラ
ムはあらゆる悪の影響から若者を守り
世の中の誘惑を拒んで空白になってい
る彼らの心を満たしてやらねばならな
い。またもちろん、あらゆる問題、個
人的疑問に対しすばらしい万能薬とな
るのは祈り、朝な夕な個人で家族でさ
さげる祈りである。

批難し不平を言うおとなは、関心を
持ち理解を示すおとなほど効果をあげ
得ない。純粋な若者には愛と理解のみ
が有効なのである。また若者が純粋で
あるには、愛によって彼らを励まして
やらねばならない。若者が正しかろう
が、悪かろうが、我々は彼らを受容さ
ねばならない。こうして若者に、識別
と学ぶ機会を与えることができる。しか
しまた、若者には正しい選択を与えね
ばならない。今日、多くの人はそのこ
とに失敗している。

確かに「社会の中で神聖さを汚すこ
とがきわめて一般的になり、次代を担
う者がそのはなはだしい圧力のもとで
光の道と暗黒の道を正しく選ぶことが
できない時代がやってきている。」

我々が両親としてまた若者の指導者
として、若者に「正しい選択」を与え
る力と良き分別を持ち合わせることで
きるよう、心からへりくだってイエス
・キリストのみ名により祈るものであ
る。アーメン。

1. アレクサンダー・ポープ
(1688—1744) 英国の詩人

父よ

リチャード・L・エバンズ

人生は周期をめぐる。無垢で偽りのない信頼しきった幼児、我々に手をひかれる子供時代、我々と共に歩む青年時代と。時は場面を変える。——時にせわしく、おそらくは焦燥もまじって、季節は過ぎる。——時には頑固

に自信に満ちて、時には何かを親から引き離しながら。時が熟しきると、謙遜な心で望みを持ち、もしその時気づいていたならば、我々のために多くを尽くしてくれたはずの人々のことを、感謝をもって再び振り返りたまえ。何年前か。フランク・クレインはそのことについて書いた。その中からあげてみよう。

父よ

私は、30年前に亡くなったお父さん、あなたに手紙を書いています。私はあなたに何か言わねばと思います。あなたの家でまだ私が少年だった時に、気づかなかったことを。今になってやっと、長いつらい勉強の年月を経たのち、やっと今、私の髪も白くなった時に、私はあなたの心がわかるのです。

私はあなたにとって悩みの種だったでしょう。私は自分のささやかな知恵を信じていました。告白したいのは、あなたに逆らった一番よくない罪です。自分を理解してくれないと感じた心です。あなたは私自身よりも私をよく理解していました。あなたは何と忍耐強かったことでしょう。今にして思います。私に近ようとして努力した物事の何と哀れであったことか。私を遠ざけたものは何だったのでしょうか。わかりません。しかし、息子と父親の間に壁が立ちはだかることは非劇です。

1時間でもいい、今ここに、この机の向かい側にあなたがいたなら、もう何の壁もないことをあなたに告げられるのに。今私はあなたを理解しています。お父さん、どんなにあなたを愛していることか。再び少年時代に帰ることができたならばよいものを。

お父さん、私がそちらへ行くのもそう遠くはないでしょう。あなたが最初に私の手を取り、手をひいて下さると信じています。最も偉大な富、地上の貴重な宝、しかし一番理解されていないものは、父親の息子に対する力強い愛、やさしさ、助けようとの願いであると、私は知っています。なぜと言えば、私に息子があるからです。天のどこかで、静寂の中から、聞いて下さい、お父さん、私を信じて下さい。



「ああ、大変！
会に行かなく
ちゃならな
かったの。」

はじめての言葉

アイリス・シンダー・ガード

レイナ・カーホンは家の前の階段を軽やかにかけのぼり、居間に入った。「お父さん、いる？」

「台所だよ。」

彼女は台所の廊下へ行った。父はストーブのかたわらで、小ナベの中身をかきまぜていた。「おまえはまた忙しくて夕食のしたくができないと思ったから、スープのかんづめを切ったところなんだよ。」

レイナは罪の意識におそわれた。彼女は自分と父だけしか家にいなければ、かえって気楽だろうと思っていたのである。チャールズは仕事に行き、母はアンの初めての出産を手伝いに出かけたのだが、レイナは、父の食事や衣類の世話をすると約束していたのだった。彼女は、自分は少しだらしなかったと考えた。

「お父さん、ごめんなさい。早く帰らないで。デビーと話していて時間を忘れていたの。トーストもあるでしょ。」

「いいんだよ。でも、早く帰れたらよかったね。」

「ああ、大変。こんなにおそくなっちゃって。ダンスの装飾委員会に行かなくちゃならなかったの。走ったらバスに間にあうでしょうね。」

レイナは急ぎながら、父は退屈な1日を過ごすだろうと考えた。父の口のまわりのしわがいつもより深く、顔色がさええないように見えた。

門の所で、レイナは扉に手をかけ、ちょっと立ち止まった。本当は戻って父にデザート位は作ってあげるべきだった。しかし、レイナは学校の講堂の飾りつけが途中で、音楽がまだ決まっていないことを思い出し、門をしめて、バスの停留所へかけだした。

家へ帰る頃には、すっかり日が落ちていた。窓はみな暗く、レイナは、父がどこへ行ったか心配しながら台所の灯をつけた。スープは手がつけれないままテーブルの上にあった。ひやっと冷たいものが体を吹き抜けた。

「お父さん？」彼女が居間のランプをつけると、父は長椅子に横になっていた。握ったげんこつを胸の上に置き、目を閉じていた。かけよってひざまず

フィクション

くと、父は苦しそうに荒い息づかいをしていた。
「まあ、お父さん。どうしたの？ 何があったの。」
彼女は叫んだ。

父は目を開いて、「心臓だ」というと、ぜいぜいあえぎながら言った。「医者……」

レイナは電話にかけよった。指はひどくふるえて医師の自宅の番号をまわすのもむずかしいほどだったので、緊急時の電話番号が控えてあったのがありがたかった。シャノン先生が、「2、3分で救急車が行きます。病院で会いましょう」と言ってくれた時、彼女は感謝の祈りをつぶやいていた。

しかし、2人が病院に向かっている間は15分余りであると知りながら、レイナにはその時間が恐ろしく長いように思われた。担架に乗せられている意識も少ない父を見ながら、彼女は繰り返し自分に言い聞かせていた。「もしお父さんが死んだら、私はどうしたらいいかわからない。」彼女の日々をやさしい腕で包んでくれたおだやかな良い父がいな生活はいいいどのようであろうか。彼女は、父のいない世界は恐ろしさ以外何もない世界であると思っていた。

病院に着くと、父はせわしげに人の行きかう長い廊下を、押されて行った。父が見えなくなったあとも、レイナは何をして良いかわからずそのまま立ちつくしていた。間もなく看護婦が来て、受付で入院手続きをするようにと言われた。

受付の女性は「お父さんは保険証を持ってきましたか」と聞いたが、父の財布に保険証があるかどうかレイナは知らなかった。

その女性は「保険証があるのでしたら持って来させます。それからお返しします」と言った。

数分して、白衣の青年が父の財布を捜して保険証を持って来てくれたが、その時レイナは父の容態がむずかしいことを直感した。彼女は財布を受けとり、すりきれて柔らかくなったしなやかな皮の感触を手に感じた。受付の女性に必要な物を手渡してから、夜までには帰ると言っていた母に電話をしに立った。そして待合室にすわりながら、彼女は父の物だというだけで慰めが得られるかのように、財布をしっかりと握りしめていた。

財布の中には大事なものがたくさん入っていると思ううちに、レイナはいつか父が持っていた、夏山でとった自分とチャールズとアンのスナップ写真のことを思い出した。彼女はその写真がまだ財布の中にあるかどうか、財布を開いてみた。すると、きちんとたたんだ1枚の紙が、財布から落ちた。

彼女は何気なくそれを開いてみた。数行の言葉にざっと目を通すと、それは1週間前の新聞の切り抜きで、自分が感動した記事であることに気がついた

が、父もそれを読みとっておいたのだった。レイナは自分の悪かったことを痛切に感じた。

彼女は切り抜きをもう一度読んだ。「私は55歳になろうとしている者で、家族のためにいっしょうけんめい働いてきました。子供たちは必要なものをみな持っています。なぜ子供たちは、私を、自分たちを愛している者、自分たちの愛を必要としている者として考えてくれないのでしょうか。息子や娘の1人でも私の手をとって『お父さん、大好きだよ』と言ってくれるなら、どんなことをしてもいいほどうれしいことでしょう。」

レイナは涙ではおをぬらしながら、ていねいに切り抜きを折りたたんだ。「ああ、お父さん。死なないで。今まで気づかずにいたことを、お父さんに言いたい」レイナは心で叫んだ。

時間はゆっくりと過ぎていった。レイナは休みながら目を閉じて、父とのいろいろな小さな出来事を思い起こしていた。学校に通っていた幼い頃、父が気づかずに大またで歩き、文句を言うと、笑いながら彼女にあわせて歩幅を小さくしてくれたこと。誕生日のことも心に浮かんた。父がプレゼントに買ってくれたはく製の虎が大きすぎて包めず、恥ずかしそうにして仕事から帰ってきたこと。

大きなことも思い浮かんた。盲腸になって寝ていた時、目をさますと、ベッドのわきにお父さんがほほえみながら腰かけていたこと。お父さんの顔を見たときに、すっかり良くなったと思った。デートに出かけた夜のことも思い出された。デートに出かける時、父は「おまえは信頼できる子だということを、父さんたちはよく知っているよ」と言ったものだった。

シャノン先生が部屋に入ってきた。レイナはさっと立ちあがり、彼のそばにかけよった。先生は腕を組んだ。

「終わったよ、レイナ。お父さんは休んでおられる。」彼はやさしく告げた。

レイナはほんと息をついて尋ねた。「父に会えるでしょうか。」

医師はうなづいた、「いいよ、でも少しだけだ。」

ゆっくりと、そして幾分気恥ずかしげに、レイナは父の部屋へ入り、父が寝ている高くて狭いベッドに近づいていった。彼女は、いつも忙しくて活発なお父さんと、何と違う静かなお父さんだろうと感じた。顔は白かった。しかし、額のしわは薄くなっているように見えた。目は閉じられていた。

レイナは椅子をベッドの近くへひき、腰をおろした。そして、父をみつめ、ほほえみを浮かべて、父のがっしりとした手に自分の手をのせ静かにささやいた「お父さん、大好きよ。」

パッカー長老特別大会



4月18日、パッカー十二使徒を迎えて、岡町支部で特別大会を開きました。パッカー長老は1945年に、伊丹空港に空軍将校として勤務されたことがあり、モルモン経を翻訳された佐藤龍猪兄弟姉妹に大阪の軍人大会の折、関西学院大学のプールでバプテスマを施したこと、その時から日本に伝道が再開され、1週間前に大阪で1,300人を上回る大会を開くほどに進歩していること、日本に対する神様のみこころ、特に彼の貴重な体験の中に日本人がいつも関係していることなどについて、詳しく話されました。この話を通して、彼が日本人に対して持っている深い愛を感じました。

その他に伝道部長としての在任中の素晴らしい話の数々を聞き、大会に出席した私たちは、御霊に満たされ、清い水に洗い流されたような、すがすがしい思いで、パッカー長老に別れを告げました。

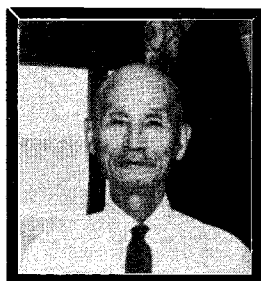
伝道部短信

4月8日、ミッションホームで、最初のマスターMメン、ゴールデングリーナー賞を得た兄弟姉妹のバンケットを催しました。

来年は互いに多くの兄弟姉妹が、賞を得てこのバンケットに参加されるよう希望します。



周藤珠彦兄弟、逝去さる



1951年11月25日64才で改宗して以来、21年間、熱心に教会のために働いて来られ、最近4年間は、特に伝道部系図委員として働いて来られた周藤兄弟が、去る4月20日遂に85才の天寿を全うして、神に召されました。次の文は彼が、ミッションリーダーにあてて書かれたものです。再読して系図の仕事を通して先祖の救いのために働く決意を新たにしましょう。彼もまた霊界において、私たちの働きを見守っておられ、彼自身、霊界の人々に、熱心に伝道をしているに違いありません。

「愛には酬いを望まないのが本体ですが、凡夫には純粋な愛というのが少ない。酬いられない愛、これが生きた人間には得にくいものですが死人に対する愛こそ酬を望まぬ愛であろう。これが天に積まれる宝であろう。

死人は目には見えない。しかし人情としては何とかしてあげたいという気持が湧く、それが仏教ではお盆や正月や命日が来ると仏事を営んで死人に奉仕をして来た。それは生ける人にするように真心から親切にしたことは浄土宗や真宗の家に育ったものはよく体験しておる所であろう。それがキリスト教になると、こんな行事はないので死人に思いをかける機会はないのであります。然るに我が末日聖徒イエス・キリス

ト教会においては系図を探究し、系図を作成し、神殿の儀式を執行する。而してそれが永遠の生命につながる。仏教では迷信または自己満足に外ならないが、我が末日聖徒イエス・キリスト教会においてはこの仕事は、実弾でありことごとくこれが的中するのであります。そして酬いを望まず無料奉仕である。これこそ愛の実践として純粋なものであります。

これをなすためには時間を費やさなければなりません。時間は生命の一部であります。これを犠牲とするのです。調査し資料入手のためには旅行もしなければなりません。家々に伝わる系図も調べなければなりません。位牌、墓所、寺の過去帳、縁りの地の神社仏閣、郷土史、図家歴史、それらの資料を得るため図書館の利用等々相当の出費、体力と精神力と時間とを要します。そしてその苦勞に酬ゆるものは現世においては何もありません。ただ先祖や親戚の死者が救われた満足感の外何物もありません。

その返って来ない所に美点がある。すなわち真の愛と言える点がある。酬いを望まぬ奉仕こそ真の愛である。これを実践する大きな仕事の一つが系図作成作業である。すなわち系図を作成し、苦心惨憺系図協会にまで送り神殿の儀式にあずかる何と美るわしいことでありましょう。

会員として是非このことを実行して戴きたいと存じます。かくして『シオン山の救手達』として取り立てられる所以であります。

初の地方部バザーで30万

東 北 地 方 部

3月20日（春分の日）に東北地方部で初めての地方部バザーを開きました。

これは、

1. 共に働き、労苦と喜びをわかち合うことにより会員同志の愛と信仰を増す。
2. 最も確実で成功率の高いバザーの方法を地方部の全員が身につける。
3. すべての支部伝道所が自分達で獲得した予算を持つ。

を目標として、会員の捧げ物（寄贈品）を中心に行なうことになりました。

準備期間は1カ月そこそこでしたが、各地より3,462点という多数の寄贈品が寄せられました。18、19日は地方部大会でしたので、18日には参加者全員で寄贈品の登録分類や8千枚のチラシ配りをしました。仙台市内を地図でブロックに分け、チームを作って1軒1軒に配る方法なので、伝道活動にもなりました。

さて、当日は、朝から無情の雨が降り続いていましたが、行楽に出かけないという意味では、かえってバザーに幸いしたかも知れません。午後1時から3時半までのわずか2時間半の間に30万を越える売上げとなったのでした。もちろん会場には開場前から客が押しかけ、行列するありさまで、開場後1時間あまりは押すな押すなの混雑ぶりでした。

会員たちは午後2時から買ってもよいことにしたのですが、閉店まで時間もなく、衣料品などじゅうぶん見る余裕がないようでした。もしその時間があったら売上げはもっと伸びたことでしょう。

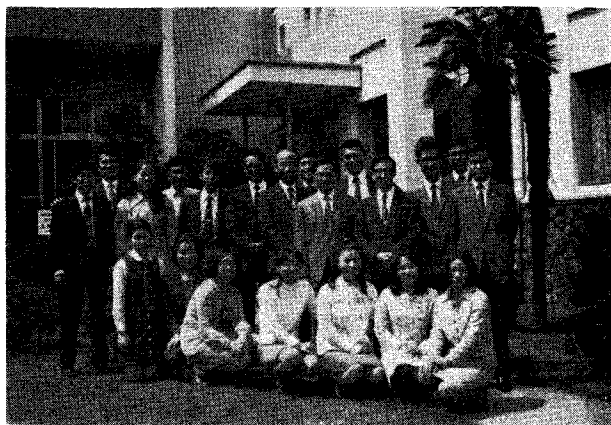
私たちは、このバザーによって、物質的な活動の奥にある霊的な祝福を豊かに受けたことを感謝しています。4月には八戸伝道所がさっそくこの方式でバザーを開催、4万円以上の収益をあげています。



西地方部セミナー開かる

よき天候に恵まれた、天皇誕生日の休日を利用して、日本伝道部、西地方部のセミナーが開かれました。主催は地方部長会、参加者は地方部評議員、地方部補助組織役員、そして各支部の支部長たち、場所は伝道本部で、泊りこみの特訓です。（西地方部には、浜松、静岡、沼津、小田原、長野、松本、甲府の各支部があり、富士と諏訪に支部の卵があります。全部で880人ほどの兄弟姉妹たちがいます。）

まず4月28日の夜7:30から10:00まで、簡単な紹介のあと、「三人の見証者」、「家庭の夕べ」、「ホームティーチング」のフィルムをみることができました。29日は朝6:30か



仕込みのおいしい料理に姉妹たちの食欲のすすむこと、すすむこと……）午後からは、ケース・スタディーをおりませた、ブレーン・ストーミングのセッションです。「私は、いかに責任をはたすか」というテーマにもとづいて、人材を育てること、良きコミュニケーション、教会内での結婚等々、各支部共通の悩みと、解決策をみんなで考え合いました。

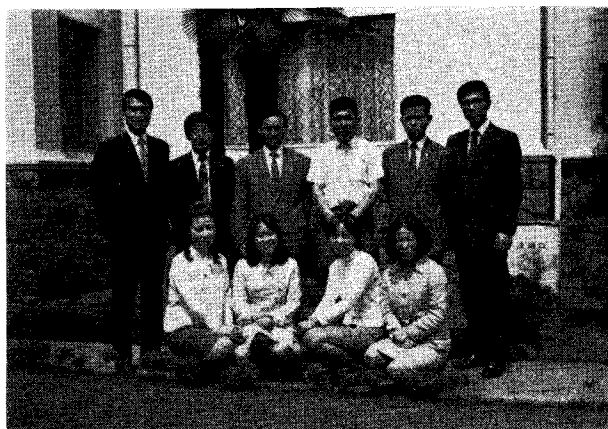
この地方部セミナーで得たことを次の機会にどう実行にうつせたかを話すことができることを祈りつつ、夕刻5:30頃閉会しました。

写真説明

上右 新しく組織された日本西地方部の役員の方々

上左より、青柳地方部長、広瀬日曜学校会長、井原YMMIA会長、笠井地方部評議員、辻本地方部評議員、阿部第一副地方部長兼書記

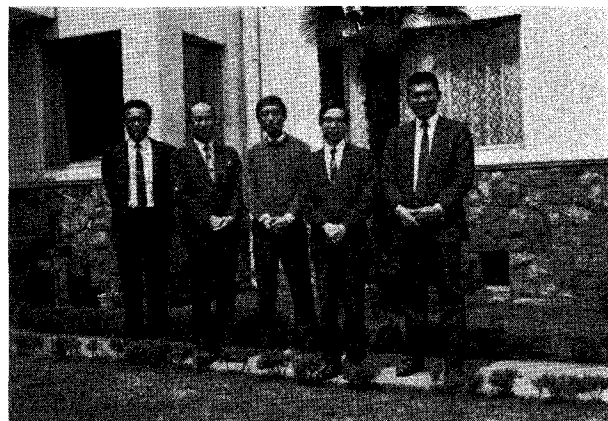
下左より、小柳扶助協会会長、吉田初等協会会長、市川YWMIA



らの勉強会で、宣教師たちも顔負けでした。教義と聖約解説を輪読し、毎日少しずつ聖典を読むことと、暗唱聖句を決めて、8:00に終わりました。

8:30頃から1時間ほど、地方部長会、評議会と支部長会が話し合いをする機会があり、10:00から青柳地方部長の司会で、セミナーが始まりました。まず、阿部副地方部長が「指導者に望まれること」、青柳地方部長が「指導の大切さ」という題で話しました。次に伝道部の各補助組織の指導者たちから、いろいろな話と、質問と答えの時間がありました。

中になごやかな昼食の時間をはさみ、（アボ姉妹のハワイ



会長、金原扶助協会書記

中央左 地方部合宿セミナーに集った伝道部、西地方部役員及び支部長の方々

下右 西地方部内の支部長の方々

左より、岡村静岡支部長、大村浜松支部長、市川甲府支部長、山田小田原支部長、手塚沼津支部長

武蔵野第6団誕生!!

——第3ワード部ボーイスカウト——

去る2月から第3ワード部ではボーイスカウトプログラムが行なわれています。昨年の6月頃から数人の兄弟達が指導者講習会に出席したり、ボーイスカウト地区役員と交渉したりして、今年1月5日に無事、日本連盟よりボーイスカウト日本連盟武蔵野第6団として認可されました。団の設立までには監督会やリーダー達が子供の募集や資金集め、そして説明会とたいへんな苦勞がありました。

現在武蔵野第6団にはカブスカウト（小学2年～5年）、ローバースカウト（大学生及24才位）がそれぞれ12～3名ずつで活動しています。カブスカウトは毎週土曜日午後3時30分から、ローバースカウトは毎週火曜日午後7時から、それぞれ集合をもっています。カブスカウトの指導者には、隊長1名、副長2名、副長補1名、デンマザー5名がいます。内訳は兄弟2名、姉妹7名です。カブスカウトに限り女性も正式に指導者となることができます。カブスカウト達は、教会員の子供ではありませんが、彼らの兄弟姉妹の中に会員がいたり教会に通っている人がいます。カブスカウト達の中にも、プライマリーや日曜学校に出席する子供も少しずつ増えています。彼らの御両親が教会でのスカウトプログラムに対し、非常な期待と感謝をもっています。御両親が教会へお出でになる日も近いことでしょう。

一方、ローバースカウト達は全員が教会員であり、活発な神権者です。彼らの中には、スカウト活動経験者が数人います。教会の教義や活動と、ボーイスカウト精神と技術を調和させようと必至にがんばっています。この人々は将来武蔵野第6団のスカウトリーダーになる人々です。ローバースカウ



ト達は教会員の中からの募集ですが、徐々に増加してゆくきざしがみえます。

現在第3ワード部では今年から来年にかけてボーイスカウト隊（小学6年生から中学3年生）を発足させる準備をしています。

御承知のように、アメリカにおけるモルモンのスカウトの水準は、アメリカばかりでなく、世界一と評されています。日本においても各ワード部各支部に、ボーイスカウト隊を結成し、日本のモルモンボーイスカウトの組織ができる日も近いことでしょう。第3ワード部監督会も、第一副監督が武蔵野第6団々委員長として、監督はスカウト活動を資金的に援助する御両親達が結成する育成会会長に、第二副監督は団委員として、このプログラムに力を注いでおられます。この他にも、ステークス部高等評議員、ステークス部YMMIA会長の兄弟達の御力を借りております。このように、神様から召されている人々の力を借りて進めてゆくプログラムです。将来教会の子供達がこのプログラムで成長し、立派な神権者として育っていくことでしょう。このプログラムが完全に教会のプログラムと調整されて、発展してゆくことを望んで止みません。なお武蔵野第6団設立にあたり、御尽力下さったステークス部およびワード部の多くの指導者に感謝しています。

このプログラムに興味のある方は第3ワード部へ見学に來てください。神様がこのプログラムを、またすべての教会プログラムを祝福されますよう祈っています。

第3ワード部 武蔵野第6団

カブ隊々長 小林 正 幸



